



094109-001-1

特12-767

新桂川

伊原 青々園 / 著

前

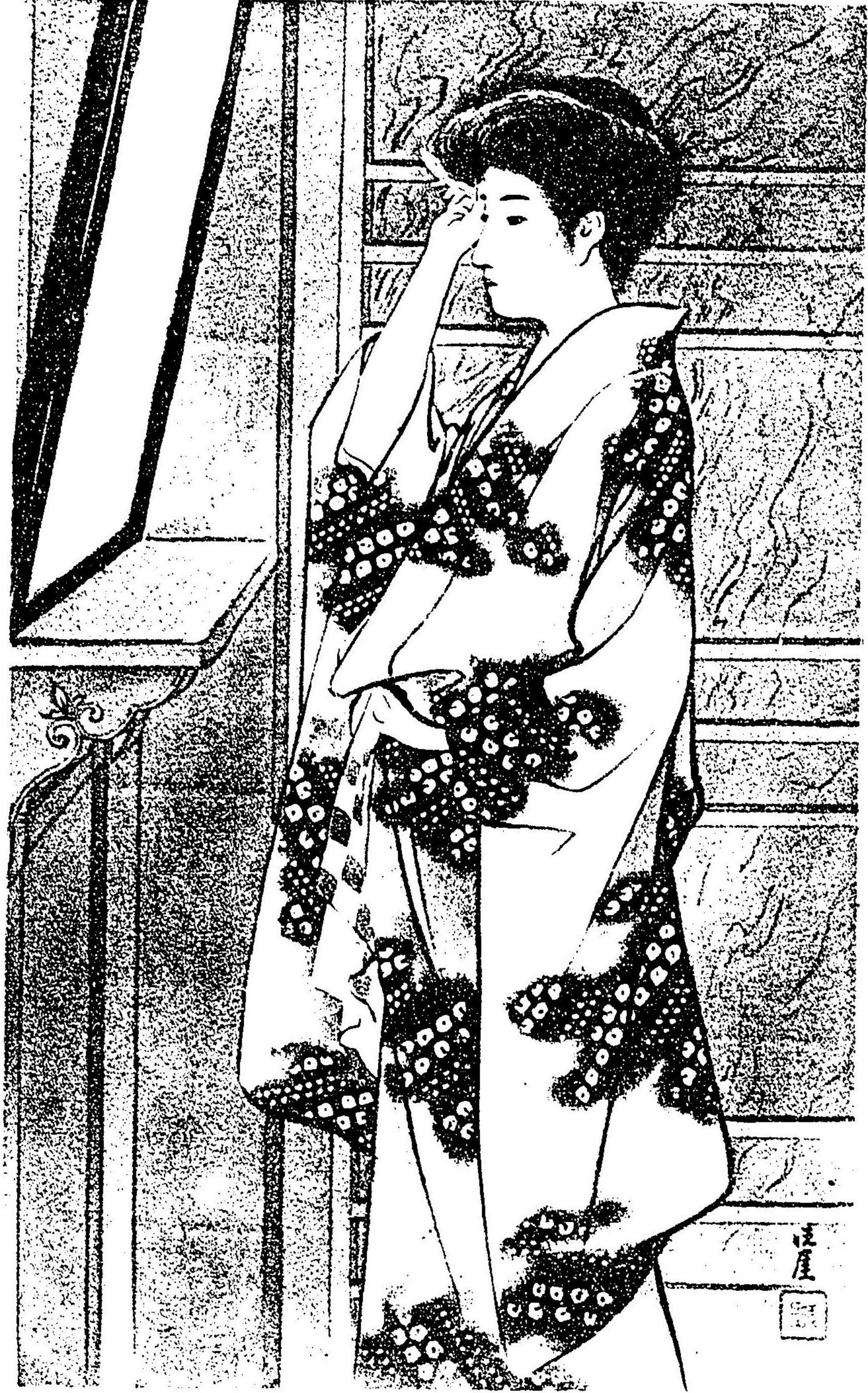
M42, 44

DBQ-1585









持12
767

川 桂 新

新 講 話

箱根桂川

伊原青々園

明治

4. 9. 21

廣文

箱根の福住樓へ上りの最急行列車で着いたのは二人連れの紳士だ。

人は三十を五つと越さないやうに見わるが、頭の毛も鼻の下の八字髭も真つ黒い。皮膚の引締まつた、色は白くは無いが艶のある、そして音み走つたうちらに笑ふと愛嬌のある、此んな人は能く見掛よりも意外に齡を取つて居るものだ。

もう一人は大きな薬罐頭の廻りだけを生毛のやうに薄いのが取巻いて居る。其のくせ口髭にも白髪は一本もなく、顔から身體中が油ぎつて、肥つた割合に脊の低い格好からが、喜劇向きに出来て居る。何處

(1)

へ行つても五十から下には見られぬといふ押出したが、實は其れほど老けて居ぬかも知れぬ。

然し、兎に角、禿の方が年嵩で、身分も上だといふ事は、座敷の上座に坐つて居るのと、御互ひに應對する様子でも知れる。

「綱田君、此處まで歸れば江戸へ落付いたも同前ぢや、今夜は大いにくつろいで飲まう。」

綱田と呼ばれた年下の方は會釋して、

「其うですね。随分長い旅でしたから、あなたも御勞れでしたらう。」

「何、私は平氣なものぢや。酒と美人さへあれば、何處だつて私の故郷ぢやもの。アハ、、、其處へ行くと、君のやうな謹直な君子は長旅ぢや窮屈で困るだらう。」

「其うでもありません、外國に居る間もホームシックなんぞ起した事

がありませんから。」

禿頭は輕くうなづいて、

「成程、其うぢやつた。旅行にかけては、君の方が私よりも經驗があるのだね。外國まで股に掛けたんぢやから、巴里の美人を見て來た君に對つては、京女の美を語つても到底ダメぢや。」

「否、私の外國へ行きましたのは、眞の視察の爲めでしたから、其ういふ閑日月が無かつたのです。」

「アハ、、、何んなに忙がしくつても、其んな閑日月はあるものぢや。然し、君のやうな堅い人間では、其うかも知れぬが、君だつて若い時分には随分遊んだといふぢや無いか。」

「あなたに其う言はれますと、恥かしい次第ですが、廿歳代には馬鹿な事もしました。」

「ム、其うちやつて、私は新倉から其の談を聞いた時に、事實だとは信じなかつた。大門は何方を向いて居るか知らない男だと私は思つて居つたが、中々吉原で全盛ぢやつたといふ事ぢや。處で、今夜は、君も昔の綱田に歸つて、藝者でも上げて騒がうぢや無いか。これでも箱根には中々美人が居るよ。君なんぞ、何時も家族同伴だから、其んな事は知るまいが、春本、林家といつて、丁度赤坂と同じ名前な藝者屋があるんぢや。万一それで足りなけりや、小田原まで電話を掛けると、三十分で召集に應ずるといふ譯なんぢや。小田原には、あんな狭い所で、何百人といふ藝者が居るんぢやからね。」

「でも、私は酒を飲まんですから。」

「酒は飲まんでも宜いぢや無いか。藝者を相手に談でもするさ。東京ほどの代物は居まいが、其れでもマンザラ馬鹿にしたものぢやない。」

「禿頭が眼尻を下げて女の噂をして居る所へ、女中が膳部を持運んで来た。」

(二)

「お前は何と言ふたかな。わらう美人になり居つた。」
禿頭は猪口を取上げながら、酌をする女中に言つた。

「私名前なんぞは御座いませぬ。」

「お前の方で言はなけりや、私が當てゝやらう。お花か。」

「いゝね、違ひます。」

「其れでは、お君。」

「いゝね。」

「はてな。では、お玉ぢやらう。」

「其ういふ氣の利いた名前ぢや御座いませぬ。」

「ではおさんか。」

「何うせ私はおさんごんで御座いますわ。」

「アハ、其んなにデラさないで名前を聞かしてくれ。綱田君。女
どいふ者は秘密の動物ぢやね。自分の名前さへ打明ける事が出来ん
だから。」

「其うですね、寧ろ其の内端の所が女の直打かも知れません。」

「君は婦人の方へ肩を持つね。だから何時でも女に持てるのぢやが、
私は女を見ると悪口が言ひたうなつて成らんぢや。」

「でも、私の事を美人と仰つたぢや御座いせんか。」

「其うく、全く美人ぢやから美人ぢやと言つたのさ。綱田君。不
思議ぢやよ。何んな山出しても此の温泉へ三年奉公して居ると、
剥けて美くなるんぢやさうぢや。」

「其うですかな。」

酒を好まぬ綱田は迷惑さうに受け答へして居るを、禿頭は氣が付いて、

「處で、君は一向飲まんやうぢやね。麥酒なら些しは遣れるだらう。」

オイ、名なしの女中。麥酒を持つて来ないか。そうして先つき言ひ付
けた藝者も早く。」

「畏りました。」

女中が立つて行つた跡で、

「綱田君、君は何うして其んなに鬱いで居るね。今夜は長い間旅行し
た慰勞會ぢやから、無禮講で大いに陽氣にやらうぢや無いか。」

「いや、鬱いで居るんぢや無いですが、あなたのやうに酒が行けないな
のですから。」

「酒が飲めん事は私も知つて居るが、君が陽氣になれん原因は其の以

外にあるのぢや。其の原因は君の家庭なのぢや。綱田君。私は何も彼も能う知つて居る。君の親御たちを悪く言うては濟まんが、全く君の母さんは大變な女ぢやからね。君は能く我慢をして居る、と私は感心して居るのぢや。一體、君の父さんは實業社會でも、佛さまと言はれた好人物なのに、彼んな細君を迎へられたといふのが私には解せんのだぢや。」

ダラシのない冗談ばかり言つて居た禿頭が、眞面目な話になると、丸で變つた人のやうに、調子にまで貫目がある。

綱田は鳥渡頭を押へて、

「其ういふ事があなたの御耳にまで入つたのは恐縮ですが、然し、母ばかりが悪いのでは無くて、一つは私が不徳ゆるぢや、と自分を顧みるより他はありません。」

「全く君はぬらい。父母の悪聲を外へ洩らさず、自分の不徳ゆるぢやとは恐入つた。」

(三)

藝者が來たので、ジミな談が途切れて、座敷が陽氣になつた。

「もし、旦那。濟みませんが、妾にもお猪口を頂戴な。」

「藝者の方から盃の催促とは驚いた。」

「鳥渡其んな事で驚くやうでは、あなたも度胸が無いわね。私盃をくれないやうな御客様なら眞平ですよ。」

「こりや愈々驚いた。お前に逃げて仕舞はれては困るから、それ遣るよ。」

「ありい。私酔つて居ますから御無禮をして。旦那。勘忍して下さいな。」

「ム、大分好い機嫌ぢや。」

「其うでせう。私お酒の氣がなくちや生きて居られないんですもの。濟みませんが、序にお酌もして頂戴な。随分我が儘な藝者でせう。お客遣ひが荒い事ね。」

「アハ、網田君。大變な奴が來をつたね。」

「鳥渡、大變な奴とは御挨拶です事ね。ですけれど、全く私は大變な女よ。箱根の狸々藝者とだけ書いて葉書を出しても、大丈夫私の所へ届きますから。」

「成程狸々藝者ぢや。其んな小さいものではマダるつこさうだから、コツプを遣らうか。」

「いね、大きな物は眞平ですわ。小さいのでチビく戴かなくつちやあ身に付きませんもの。そうして、私ばかり戴くなんて。藝者冥利ですから、お酌をしませう。鳥渡、先つきから黙つて入らつしやるお方。是非お酌をさして下さいな。」

狸々藝者は始めて網田の方へ向き直つたが、チロリとした眼を据へてチツト相手を見詰めた。

「お前は己を見忘れはしまい。」

網田に言はれて、

「アラ、あなたは竹澤さんだつたのね。丸で見變つて仕舞つたわ。」

「如何にも私は竹澤景助だが、お前も大分變つたね。」

「其うですとも、もう廿年にも成るのですもの。」

二人の談が持てるので、禿頭の方が少くテレ氣味になつた。

「其れでは、網田君。君の昔馴染なんぢやな。」

「では、竹澤さんぢやなくつて、網田さんといふの。其處な旦那。濟みませんが、斯う見ても、此の人は私が仲の町に居た時分の色なんですわ。ねわ、網田さん。あの頃はあなたも若くて好い男だつたわね。其れが斯んな分別くさく澄した男になつて。昔馴染に、久しぶりに會つたんだもの、私にお酌の一つぐらゐしてくれたつて宜いでせう。」

嫌みにしな垂れかゝるので、網田が濫々に酌をするのを、禿頭はヂツト見て、

「では、網田君。餘程弱い尻があると見わるね。」

「旦那の前ですが、弱い尻がありますとも。この人は散々私に惚れさせて、途中から逃げて仕舞つたんですもの。ねわ、竹澤さん。ぢやなく

つて、網田さん。あなたは餘程薄情な男だわねわ。」

「成程、そういふ弱い尻があつては、網田君が酌ぐらゐせねば成るまい。」

「其うですとも。旦那の前ですが、聞いて下さいな。其の時分、この人は大文字屋に熱くなつた花魁があつて、私は能く御座敷へ呼ばれて居たんですが、花魁が好いと思ふ男は、私だつて好いに違ひはないでせう。ですから、私この人を横取りして仕舞つたの。ねわ、竹澤さん。彼の頃は面白かつたわねわ。田甫の草津で真猫で居る所へ、大文字屋の新造が飛込んで来て、藝者のくせに花魁の客を寝取る盗坊猫だつて言やがるから、私が散々痰火を切つて遣つたのよ。」

(四)

「其れほど深い仲があつたのが、何うして分れたんぢや。」

「何うしてつて、私嫌はれて仕舞つたの。幾ら呼出しをかけても、馴染の道なんですもの。ねね、綱田さん。私餘りひどいと思つてよ。」

「つまり、其の時分から、綱田君が堅氣になつて、遊びをよしたんちやらう。」

「其うです。其れには色々いろくの動機どうきもありましたが、何時まで馬鹿な真似まねをしても詰まらない、と熟々つくづく感じましたので。」

「でもねね、男をとこくらね手前てまが勝手がなものなは無ない事ことよ。自分じぶんで面白おもしろい時ときには散々さんざん遊あそんで置おいて、都合つがうのわるい時ときに捨すてられて仕舞しまつた日ひには、相手あひてになつた女をんなこそ好いい面つらの皮かわぢやありませんか。いねさ、斯こんな事ことを言いつたつて、私わたしが愚痴ぐちをこぼすんぢやありません。何どうせ合あ合せ物ものは離はなれ物ものですもの、此この人ひとに捨すてられた當座たうざは恨うらんでも見みたけれど、些ちしたてば、其そんな事ことは忘わすれて仕舞しまつて、私わたしにも新しん規きな色いろが入いり變かはり立たち變かはり

り出来できたんだもの。言いは、浮氣うきは五分ぶ々ぶでさあ。だから、綱田つなださん。私わたしも薄情はくじやうのやうだが、お前まへさんの事ことは何なんとも思おもつて居ゐやあしない。其そんな色氣いろけはもう蘆あしの湖こへ打遣うちぢやつて仕舞しまつて、お酒さけさへ飲のんで太平樂たいへいらくをついて居ゐれば、其そんで私わたしは何なんにも不足ふそくは無ないんだもの。ねね、禿はげの旦那だんな。那な。おや、口くちが滑すべつて濟すみません。ねね、隨分ずぶん私わたしはさつぱりして居ゐるでせう。」

「禿はげの旦那だんなはひどいが、全まったくさつぱりし過ぎて居ゐらあ。」

「ですから、綱田つなださん。其その馴染なじみ甲斐かひに、ウイスキーの一本ほんくらゐ奢せつてくれても宜いいでせう。」

「其そんなきつい酒さけを飲のんだら、身からだ體たいに毒どくだらう。」

「毒どくでも樂らくでも構かまやあしないわ。酒さけでも飲のんで浮うきくしやんせか、氣きから病やまひが出るわいなてんでせう。其それも水みづつぽい日本酒にほんしゅよりは、ウ

イスキーのピンとした口當りが何んなに好いことよ。」

「ウイスキーならた安い御用ぢや。丁度私の鞆に口を切つたばかりのがあるから、貴様の爲めに健康を祝してやらう。」

禿の旦那がコップと一所に取出したを満々と注いで、一口にグイと飲み干して、

「ア、おいしい。何時も戴くのと違つて、此のウイスキーは格別の味がしますわね。鳥渡、旦那。あなたも召上がれな。」

「私は日本酒の方が勝手ぢやから、御氣に召したら獨りでドン／＼御飲み。」

「ア、遠慮なしに戴きますわ。網田さんも一杯如何。其う。あなたは昔から甘黨ね。私が惚れて居た時分から其う思つてよ。何にも不足はないが、お酒を飲まないばかりが玉に瑾だつて。これは何うも失

禮、そのつもりで今一つ戴きます。」

「お前は此の箱根へ何時から來て居るんだ。」

「其うですね。五年になりますわ。自慢ぢやないが、吉原では矢張酒ゆゑに色々不義理な事が出來たんで、横濱へ住替をして、濱も面白くないから、北海道くんだりまで旅を稼いだトの詰まりが此の箱根で山猫藝者になるなんて、餘程洒落れて居るでせう。名前も仲の町に居た時分と同じに、お辰といへば些とも音に聞こへちあ居ないの、狸々藝者の方が通り名なんですから。」

「でも、幾ら狸々藝者だつて、酒を飲むばかりが藝ぢやあるまい。ピントかシャンとか聞かして貰ひたいな。」

「其う。濟みません、私お座付も濟まさないで。ですけれど、旦那の前ですが、三味線なんざ弾かなくても好いでせう。私もう眼がチロチ

口して眠くなつてしまつたわ。綱田さん。久しぶりであなたの膝を貸して下さいな。膝くらゐ貸したつて宜う御座んすわね。どつこいしよ。そうして、ウイスキーを今一杯頂戴な。」

(五)

猩々藝者のお辰は、終に座敷に酔倒れてしまつた。

「綱田君。大變な女ぢやね。でも、君が關係した時分は斯んなぢや無かつたらうね。」

「其うです。寧ろ陰氣なくらゐ。音なしの女でしたが、尤も、其の時分から酒は大好きで、酔ふと丸つきり人が變つたやうに騒ぎ出すのが癖でした。」

「其れでは、君に捨てられたんで、失戀の煩悶から自暴自棄になつたかのね。」

「其うでない事は、先つき當人も言つて居ましたが、全く酒の爲に慢性中毒を起したものと見えます。」

「して見ると、私らも迂濶に酒は飲めんね。當人が陽氣で居るだけ、傍から見ると悲惨ぢや。私も折角好い心持に酔つたのが悉皆醒めてしまふた。」

「其うですか。あなたに不快な感じを御させ申して済みません。」

「いや、何も君が責任を負ふべき事ぢやないさ。歡樂極まつて哀情多しぢや。人間は何時でも面白い事はかりあると思ふと、當てが違ふのぢや。私も今夜はもう酒をよして、澄んだ谷川の流れの音でも聞きながら床に入らう。それに、君はまだ飯を食へないね。女中に其う言ひ付けて、此の藝者も歸してしまはう。」

禿頭の紳士がベルを鳴らさうとした途端に、先つきの女中が入つて來

た。

「おやまあ、お辰姐さんが斯んなに酔拂つて。飛んだ御無禮を致して濟みません。そうして、あの電報が参りました。」

綱田が其れを手に取上げて、

「白瀬さん。あなたへの電報です。」

「其う、白瀬と初めて呼だれた禿の紳士は電報の封を切つた。」

「ム、此れは會社の新倉から寄したのぢやが、急用が出来たから、直ぐに東京へ歸つてくれといふのぢや。」

「其うですか、でわ、何か株主の間にゴタ／＼でも起つたぢやありませんまいか。」

「私も其れが懸念なのぢやが、兎に角、直ぐに此處を立たう。」白瀬は時計を見て、「まだ上りの終列車には間に合ふ譯ぢや。」

「しかし、あなたが御歸京になりますなら、私も會社の事が心配ですから、御一所に参りませう。」

「綱田君、君だけは残つて居てくれ。此の電報だけでは要領を得ないが、果して株主の苦情でも出来たとすれば、君と私とが一所に顔を出すと云ふ事は得策でないだから、先づ私だけが歸京して、形勢を見た上で、直に君を呼戻すか、さもなければ、當分のうち君は此處に逗留しながら、遙に調停の策を講じて貰ふか、兎に角、私から報告のあるまでは動かないで居てもらひたい。」

「社長の命令は屹度遵奉致します。」

「迷惑でも其うしてくれたまへ。」

「しかし、電車まで御見送りを致しませう。」

「何、それには及ばんよ。」

白瀬が辭退するのを強いて、福住から川一つ向ひの停車場まで送出したが、白瀬を乗せた國府津行き電車がでてしまつて、福住橋まで歸りかけると、月が塔が澤の山に懸かつて、流れにうつる光りが油繪のやうに美しい。網田は、此の景色に見惚れるともなく、橋の欄干にもたれてホッと溜息を吐いた。

(六)

大日本醬油會社の重役網田景助は、其の昔竹澤景助といつて、越前福井の豪家の二男と生まれ、出京してより法科大學の秀才と唄はれたが、青春の英氣溢るゝに任せて、何時しか放蕩を始め、近所の湯島から數寄屋町と荒し廻り、扱ては吉原へ繰込んで、其の時仲の町藝者であつた彼の辰子と深き仲となつたが、國元の父親が選舉運動の手違から次第に財産を摺つて、其れまで月々に五十圓あまりの仕送りがパツタリ止

ると共に、景助は眼のあたり實家の没落に深く感ずる所があつたのか、生變つたやうな謹直な人間となり、遊びをよして苦學の人となつた。其の才能を、時の文部大臣であつた尾上伯が見識つて、自分の食客に抱入れ、景助は其の保護の下に大學を卒業する事が出来たのであるが、卒業して學士の肩書を擔ふと間もなく、實業界の隠君子と稱せられた網田用平の養子に貫はれて今の地位に上つたのである。

そうして、會社の信用は言ふまでもなく、實業社會では才學共も新進有望の男子と持囃され、赤門出の幸運兒として世間に羨まるゝ身であるに拘はらず、當人の境遇は其れほど幸福なものではなかつた。其れは網田家の家庭が餘り入亂れて居るからで、養父用平といふは、町人形氣の俗人ながら、頗る善良なる人物であるが、若くして妻を失ひ、妻を内に入れたのが今の妻君である。其れが無教育で、勝氣で、我儘で、

且放縦で、紳士の夫人として不適當である事が、綱田家の平和を攪亂する原因であつた。而も、用平には、先妻にも、後妻にも、子が無いので、前妻の姪に當る素路子といふを養つて、其れに婿を取つたのが即ち景助である。人よしの養父と、意地のわるい養母と、そうして腹を痛めぬ嫁婿と、一家が他人同士で成立つて居るだけ、温みに缺ぐるのみならず、風波の起ることは珍らしくない。橋の上にゐんで、早川に映る月の姿を眺めた景助の胸には、此の氣まづい家庭の事と、先つき座敷で奇遇したお辰との事がゴツチャになつた。

「ア、酒に酔つて管の巻ける人間は幸福だが、己は何うして斯んなに意氣地が無いのであらう。其れを思ふと、謙直とか、品行方止とかいふのは下らない。人間は名譽や地位に頓着せず、自分のしたいと

思ふ事を仕放題にするうちが仕合なのだ。酔拂つたお辰を見て氣の毒だと思つたが、お辰の眼から見たら、寧ろ己の方が氣の毒に思はれるだらう。」

物思に沈んで居る處へ、

「おや、あなたは綱田さんね。」

若い女の聲が聞けたので、綱田は吾に歸つて其の方を振り向いた。

(七)

湯本の停車場から今しも出て來た束髮の美人は、漸と十七か八かと思はれる令嬢で、是れぞ綱田景助が學生時代に一方ならぬ保護を受けた伯爵尾上基樹の二番娘咲枝である。

「あゝ、お嬢さまでしたか。今お着きですな。」

「今小田原から來たのよ。綱田さん。あなたは、些とも内へお見ねに

ならないわね。」

「お屋敷へは非常な御無沙汰をして居ます。丁度二月ほど會社の用事で關西へ旅行して、今日漸と此處まで歸つた處ですから。そして、皆さん御變りは無いでせうね。」

「はあ、母は東京に達者で居りますが、父が何時もの喘息で、熱海の別荘へ保養に參つて居ましたので、私も一所でしたけれど、熱海も飽きて仕舞つたから、箱根へ轉地に来てよ。」

「では、お父さまも一所ですな。」

「否、父さまだけは熱海の方が宜いつて、私乳母の菊と二人つきりよ。」

「お二人きりとは非常な勇氣ですな。あ、乳母さん、お前にも暫くだつたね。」

咲枝の跡についた五十許の人柄な年増に、網田は聲を掛けた。

「本當に、竹澤さん。見變るやうに、立派におんななさいましたわね。」

あなたがお屋敷で書生さんだつた時分に、お嬢さまは漸と幼稚園から小學校へお上り遊ばしたくらゐで御座いましたが、其れが斯んなにおなり遊ばして。お嬢さまが大きくおなり遊ばした割合から申すと、あなたも好い加減な齡でなくちや成りませんのに、些ともお年を召さないで。」

「あは、乳母さんに其う言はれると心細いが、全く私も年が寄つて仕舞つたよ。此れで來年は四十なのだからね。」

「おや、まあ、其んなにおんななさいますかね。成程、お嬢さまのお八つの時が、丁度三十でしたから、今年は三十九の筈で御座いますね。其れにしては餘程お若く見えますよ。」

「あは、乳母さんは大層お世辭が宜くなつたね。これでも、私が書生で居た頃には、随分意地わるくしたものだ。」

「私も其うだつたか知れませんが、あなたも随分あの頃は亂暴で御座いましたわね、私あんなイケ好かない書生さんは無いつて言ひますと、お嬢さまが、竹澤さんを悪く言つては嫌よつて。ねね、お嬢さま。あなたは本當に竹澤さまがお最負で御座いますわね。」

「だつて、私、兄さんみたいな氣持がしてよ。私は兄さんみたいに思つて居るけれど、竹澤さんは綱田へ入らしつてから、何だか水くさくなつたんだもの。」

水くさいなんて其んな事はありません。あなたは私の爲めに大恩人たる尾上伯爵の御令嬢なのですもの。お父さまのお恩を忘れぬ以上はあなたに對しても……」

「あら、だから、私水くさいと言ふのよ。恩人の令嬢だなんて、あなたは改まつてしまふんだもの。其れは父さまには何んな恩義があるか知れないけれど、私とあなたとは一つ家で育つた兄妹同様ぢやありませんか。ですから、私は兄さんと思つて居るけれど、あなたは私を妹と思つて下さらないのね。」

「でも、尾上伯の令嬢が私の妹では勿體ないのですもの。」

「其れが他人行儀といふものよ。伯爵の娘には兄弟が無くつて。」

「お嬢さまは大層理屈を仰やるのですね。宜い。議論なら宿へ行つてから悠くりしませう。そうして、お宿は。」

「あの福住なの。」

「福住なら、丁度私と同じ宿ですから好都合です、私が御案内を致しませう。」

綱田が先きへ立つて福住の門前まで来ると、矢張停車場の方から、廿五六で、色の生白い、洋服姿のハイカラ男が、息を切つて此方へ驅寄つた。

「咲枝さん。僕はあなたを追つかけて熱海から来たんだ。」

「おや、あなたは猛さん。」

今まで輝いた咲枝の顔には、何故か曇りが掛つた。

(八)

「猛さん。其んなに追掛けて来なくても宜い事よ。」

「だつて、叔父さんが僕に命令したんだもの。」

「父さまが。」

「其うさ、咲枝さんと菊とだけでは、女ばかりで不安心だから、僕に護衛をしろと斯ういふんだ。」

「まあ、私が猛さんに護衛されるの。私いやよ。ねね、菊。」

「お嬢さまの仰やるのが、御道理だと、私も思ひますわ。」

乳母が口を挿んだのを、猛は不満さうに睨付けて、

「乳母のくせに失敬な。僕だつて一個の男子だ。咲枝さんの身の上に

變つた事でもあつては行かんから、叔父さんが一所に行つてくれと言

ふのは至當ぢや無いか。」

「だつて、男子も男子によりけりだわ。猛さんに護衛されるくらゐな

ら、コスメチックをお供にした方がうるさくなくつて宜い事よ。ねね、

乳母。お前も私と二人きりで澤山だわね。」

「其うで御座いますとも。」

「其れに、綱田さんが同じ宿なんだもの。猛さんなんざ居ない方が宜いわ。」

「咲枝さんは女のくせに毒舌だから行かん。そうして、此の方は誰です。」

「其う。猛さんは未だ御眼にかつた事が無いのね。此の方は、能つく父さまの噂を遊ばす、綱田さんと言つて、私の内に入らした方なのよ。」

「はあ、綱田景助君。そうですか。」

「如何にも私は綱田景助と申す者です。」

「いや、お名前だけは豫て聞いて居ましたが、僕は尾上伯の姪で、咲枝さんとは従兄妹同士の山川猛といふ青年です。」

「山川さんの御令息。これは失禮を致しました。あなたの父さまには伯爵の御屋敷で度々御目にかつりましたが、あなたにはつる掛違ひまして。」

「僕も同様です。此の後は何うか。」

「手前も何うぞ。」

綱田は會釋を交換して、

「いや、山川さんが御出でになつたので、私も満足です。」

「綱田さん、其うちやない事よ。猛さんは私嫌ひですもの。」

「あは、御従兄妹同士で、仲が好過ぎるものだから、其ういふダをお捏ねになるでせう。」

「全く、其うです。咲枝さんと僕は仲が好いのですから。」

「いね、仲なんぞ些とも宜くはありません。」

「御嬢さま。其んな論戦は中止して、山川さんと御一所に早く宿へ参りませう。」

すると、福住から番頭が出迎ひて居る。綱田が其れく注意して、咲枝

たちを成るべく好い部屋へ案内をさしたが、咲枝は部屋へ落付くと、

「乳母。お前も勞れて居ようから、あの直ぐ御湯へ入らうね。」

「お嬢様。折角で御座いますが、私は何だか寒氣が致しますから。」

「風でも引いたんぢや無くつて。其れは困まつたわね。そうして、私ひとり御湯へ入るのも極りが悪いから。」

「咲枝さん、其れぢやあ僕が一所に入つてやらう。」

先つきから何處へか姿を隠して居た猛が、出しぬけに入つて來た。

(九)

「猛さん。失敬だわ。あなたなんぞと誰がね湯へ入るものか。」

「僕だつて、咲枝さん入りたくは無いが、叔父さんが護衛をしてくれといふ命令なんだから仕方がないさ。」

「護衛なんぞ澤山よ。乳母が入らなければ、私ひとり入つてよ。乳

母。お前、寒氣がするなら早く休んでいゝから、あの女中を呼んでおくれ。」

「いわ、お湯殿までは私がお供を致します。」

お菊は、靴の内から浴衣や石鹼を取出して、咲枝を浴室へ案内したが、網田が疾に氣を利かして、咲枝の入る浴室は「貸切」といふ札を貼らしてある。

「乳母。網田さんは何うして斯んなに信切だらうね。」

「本當で御座いますわね。御嬢さまの御身内を悪く申しては濟みませんが、猛さんとは全で反對で御座います。」

「全く其の通りよ。私の從兄に何故あんな嫌な人が出來たんでせう。其のくせ、山川の伯父さんも、伯母さんも、悪い方ぢや無いんだに。」

「そうして、御背中を流しませう。」

「いね、浴びるだけで澤山だから、お前は彼方へ行つてお休み。」
「では、御嬢さま。お浴衣や、お化粧の御道具は、此處へ置いて参りますから。そうして、御湯から御上り遊ばす時分には、又菊が御迎ひに参ります。」

「其れからね、序に綱田さんの所へ行つて、後ほご私が御禮に参りますつて、其う言つて御くれな。」

「宜う御座います。では御ゆつくり遊ばしませ。」

咲枝ひとりが浴室へ残つたが、一風呂浴びると直ぐに上つて、浴衣で姿見の前に立つた美しさは、又格別だ。

「あゝ、乳母は腰帯を何うしたんだらう。何にも揃へて置いた筈なんだが、先つき着物と、一所に持つて行つて仕舞つたのか知ら。」

鏡臺から衣桁のまはりを探がして居る處へ、板戸の開きがバツト明い

て、猛の顔が再び現はれた。

「咲枝さん。美人になつたね。」

「おや、猛さん。あなたは何故こんな所を覗くのです。あなたは女に對する禮義を知らないの。」

「むゝ、僕だつて覗見してはレデーに失禮だらゐは知つて居るさ。でも、僕は咲枝さんを警護する役目ぢや無いか。咲枝さんが湯殿に獨で居て、何んな間違が出来ようも知れぬから、先つきから此處で警戒をして居たんだ。」

「まあ、先つきから。本當にあなたは失敬ね。」

「咲枝さん。失敬とは餘りひどいぢや無いか。僕は此れほご咲枝さんの爲めに勤めて居るんだ。咲枝さんの爲めなら、屹度火の中でも水の中でも飛込んで見せるのだ。其れに、咲枝さんは僕を嫌つて、邪慳に

ばつかり。やさしい詞の一つくらゐ掛けてくれても宜いだらう。と僕は思つて居るよ。」

(10)

「男子のくせに、女に優しい詞を掛けてくれた。あなたは其んな可笑しな事をいふから私嫌ひよ。」

「だつて、當り前ぢやないか。男子は婦人から優しくされると共に、婦人は男子に優しくされるので、此の社會が成立つて居るんだ。」

「猛さん。夫れはラブぢやなくつて。」

「其うさ。僕のいふのはラブなのだ。露骨にいへば僕は咲枝さんにラブを請求するのだ。」

猛の聲が些く頗へたと同時に、咲枝の頬にポツと赤味を帯びた。

「ね、咲枝さん。僕は咲枝さんに満身の愛を捧げて居るんだ。そう

して、其の代りに、咲枝さんも僕に愛を捧げて下さいと頼むんだ。」

猛は斯ういつたきり詞を途切つた。

そうして、兩人の間に暫らく沈黙が続いたが、咲枝は漸くに口を開いた。

「でも、私そんなこと知らないわ。」

「では、咲枝さんはラブといふ事を解しないと言ふんだね。」

「其うよ。私ラブなんか知らなくつてよ。知らないものに愛を請求したつて、其れは請求する方が無理だわ。」

「其う。咲枝さんは愛を解しない。いや、解しないでは無くて、特に僕に對しては愛といふものが無いのだらう。ね、其うだらう。其れに違ひない。」

猛は相手の答へを待設けるものゝ如く、其の顔を打守つたが、咲枝は

平氣であつた。

「其うかも知れなくつてよ。だつて、猛さん。其れは何方でもあなたの請求に應じる事が出来ないのは同じだわ。」

「ぢやあ、咲枝さんは僕の愛を受取つてくれないんだね。」

「其うなのよ。だつて、仕方がないもの。猛さん。其んな御談はよしにして、あなたは彼方へ行つて下さい。」

「いや、僕は咲枝さんから満足の出来るやうな返事を聞くまでは、一歩も此處を動かかん。」

「其れは亂暴といふものよ。猛さん。あなたは彼方へ入らつしやい。」

「嫌だ。僕は今一度咲枝さんに考へてもらひたいのだ。咲枝さんは現在從兄が失戀の爲めに自殺をしても構はんといふのだね。」

「では、あはたは自殺をして。」

「其うさ。咲枝さんに嫌はれて、僕は此の世の中に何の楽しみがあるだらう。楽しみがなければ自殺をするより他は無いちや無いか。ね、此の猛か死ぬのも活きるのも、咲枝さんの心一つなんだ。だから、今一度熟考した上で返事をして下さい。」

「だつて、私困つてしまふわ。」

「些ども困る事は無ぢやないか。咲枝さんが僕を愛してさへくれれば、此の問題は解決してしまふのだ。咲枝さんは、一體何うして其んなに冷淡なのだらう。もう十七にもなつて、子供ぢやあるまいしさ。咲枝さんのお友達では、随分自然主義の實行者が居るといふぢやないか。猛か嫌らしげに手を握らうとするので、

「猛さん、何をするんです。失敬な。」

咲枝は振り放つて廊下へ飛出した。

ついでに猛も其の跡を追掛けようとする途端に、向うから來かゝつたのは先つきの狸々藝者のお辰なので、二人は出合頭に鉢合せして、バタリと其の場に倒れた。

(一一)

猛が部屋へ歸つて見ると、咲枝の姿は見わなくて、乳母のお菊ひとりが頭を重さうにして居た。

「咲枝さんは何處へ行つたんだらう。」

「御嬢さまは綱田さんの御部屋へ挨拶に入らしたので御座います。」

「其うか。咲枝さんは馬鹿に綱田君が御氣に入りだね。」

「其うですとも。綱田さんは、御ちいさい時分から一つ屋根の下に御育ち遊ばした、幼馴染で入らつしやいますもの。」

「幼馴染だつて、餘程齡が違ふぢや無いか。其れに綱田君は妻君のあ

る身なんだから、咲枝さんが幾ら思つたつて駄目さ。

「あら、御嬢さまが綱田さんに御懐き遊ばすのを、あなたは其ういふ嫌みな事に思つて入らつしやいますの。御嬢さまはまだウブぢや御座いませんか。」

「ウブが當てになるものか。此の節の女學生は、皆自然主義といつて、肩揚げの取れないうちから男を追かけ廻すんだ。」

「まあ、あなたぢやありませんまいし、あなたこそ、御嬢さまを追かけ遊ばして入らつしやるぢやありませんか。」

「失敬な事をいふな。僕が何時咲枝さんを追掛け廻した。」

「だつて、現在、この箱根まで入らつたのが證據で御座いますわ。」

「お前は誤解しちや困る。僕が箱根へ遣つて來たのは、叔父さんの命令なんだ。」

「あなたが其ういふ體裁のいゝ事を仰やつても、私は何事も存じて居りますよ。先つき湯殿で、あなたは御嬢様に何と仰やいましたらう。」

「湯殿で僕が咲枝さんに。其ういふ事は些とも覺わがない。」

「若さま。白ばくれたつて駄目で御座いますよ。御嬢さまが顔の色を變へて、猛さんみたいな失敬な人はないつて、大層御立腹遊ばして入らつしやいました。」

「其んなに、咲枝さんが怒つて居たの。何、あれは冗談だが、お前に其んな事を知られては、僕も面白ない。」

「ですから、此の後は御たしなみ遊ばすが宜う御座います。」

「お前に其う言はれては僕も降参するよ。一體、お前と僕とは餘り仲のいゝ方ぢや無いんだが、此れからは僕もやさしくするから、お前も僕に楯を突く事はよしてくれたまへ。」

手前の爲めに御主人様の甥御で御座いますもの。あなたに楯を突かうなんて考へは御座いせんが、あなたが餘り憎まれ口を仰やるものですから、つい私も毒を流したくなるので御座いますわ。」

「其うか。全く僕が悪かつた。是れからは憎まれ口なんか決して利かないで、お前を大事にするよ。處で、先つきから頭痛でもするやうだね。」

「寒氣が致します上に、頭がズキズキ痛みますので。」

「矢張風を引いたんだ。熱海のやうな温い處から、急に此の山の中へ来た故だらう。むゝ、頭痛なら、丁度僕が妙藥を持つて居るから、お前に遣らう。」

「まあ、急に御優しくなつて薄氣味がわるう御座ますわ。」

「まさか、お前を僕が毒殺するんぢやあるまいし、憎まれ口を利いても其れくらゐな親切は僕にだつてあるんだ。兎に角これを一服呑んで

見たまへ。頭痛が屹度直るから。」

「では、頂戴いたします。」

「遠慮せずと呑むさ。そうして、僕が湯を汲んでやらう。」

「何うも御心切すぎて、迷惑いたします。」

「此れが僕とお前と仲よくする手始めぢや。そら、何うだね。只つた一服呑んだら頭が軽くなつたやうだらう。」

如何で御座いますか。まだ私には何とも御座いません。」

「それで今夜休んで見たまへ。翌日の朝は拭いて取つたやうに快くなるから。」

猛が薬の効能を述べて居る所へ、

「あの、御寝間は如何いたしませう。」

女中が次の室から尋ねた。

(一一一)

「あゝ、寢床なら、御嬢さまと私の分を此處へ敷いて下さいな。」

お菊が指圖するのを、猛は不満足さうに、

「そうして僕の分は何うするのだ。」

「あなたは別座敷と極まつて居るぢや御座いませんか。」

「僕を別座敷に寝かす。其れや行かんよ。全體僕は叔父さんの命令を受けて、咲枝さんの護衛に来たんだもの。夜半に何ういふ間違が出来て、而も僕は別な所に寝て居ましたから知りませんでした、と歸つて叔父さんに復命が出来るか。」

「でも、若さま。此方は女ばかりの所へ、あなたが御休みになつては可笑しいぢやありませんか。」

「些とも可笑しか無いよ。女ばかりで不安心だから、僕が殿居の役を

勤めるのだ。おい、姉さん。構はんから、僕の寢床も此處へ敷いてくれ。」

「でも、あなたは……。」

「何が、でもなんだ。乳母の言ふ事なんざ取上げなくて、僕の命令に服従すれば宜いのだ。」

女中が躊躇して居るのを、お菊が見兼ねて、

「では、宜う御座んす。若様の御寢間はズツと其方の方へ離して敷いて下さい。」

「嫌に僕を敬して遠ざけるんだね。まあ、何うでも宜いさ。僕だつて其んな煙たがられて殿居の役は眞平だけれど、叔父さんの命令を背く譯には行かないんだ。そうして、咲枝さんは馬鹿に遅いぢや無いか。夜が更けるのに、何時までも綱田君の所に居るのは甚だ宜くない。僕

が迎ひに行つて遣らうか。」

「若さま、御迎ひなら、私が参りますから、あなたは御先きへ御休み遊ばせ。」

「其うさな、僕も勞れて居るから、咲枝さんに失敬して、先きへ寝るとしよう。そうして、お前に先つき飲ました薬の利目は何うだね。」

「まだ何とも御座いませぬ。」

「其うか。お前は早く休んだ方が宜いせ。」

猛は其のまゝ床の前に取られた臥蓐に横はつて、蒲團を引被つたが、何時しか蟒のやうな大罽を掻き出した。」

丁度その處へ咲枝が歸つて来て、

「あら、其處に寝て居るのは猛さんぢやなくつて。嫌だわねわ。乳母。何故別座敷にしなかつたの。」

「私は左様に致さうと存じましたが、叔父様の命令だから、同じ座敷でなくては役目が濟まないつて、大層理屈を仰やるんですもの。」

「一體、お父さまが斯ういふイケ好かない人を御寄し遊ばすから、私癩に障つて成らないわ。」

「でも、仕方が御座いせんから、今晚だけは我慢を遊ばしませな。明日は綱田さんに御願ひを致して、若様は綱田さんの御座敷へ願ふとか、其處は何とでも致し方が御座いませうから。」

「其うねわ。今夜だけ、仕方がないから我慢をするんだね。そうして、乳母。お前は大層眼いやうぢや無いか。」

「いね、何う致しまして。」

「でも、眼をシヨボくして、先つきから欠伸を嚙殺してばかり居るんですもの。」

「御嬢さま、相済みません。實は先つき、若様から頭痛の直る御薬を戴きましたが、其のせいかと存じます。何時もと違ひまして、今夜は何だか眼氣がさしまして。」

「では、遠慮なく御休みよ。私も床へ入るから。」

主従共に横になつたが、お菊は直ぐにスヤ／＼寝入つてしまふ。咲枝も何時しかウト／＼すると、誰やらの手が頬へ障つたので、アツと眼を覺ました。

(二三)

「あつ、猛さん。あなたは何をするのです。」

「咲枝さん。大きな聲を立てゝは行かん。」

「だつて氣味のわるい。乳母や。起きておくれ。これ、乳母や。」

「其んなに呼んだつて、乳母は眼を覺ませやせん。僕が眼薬を飲まし

て置いたから。」

「あなたは其んな怖ろしい……さ、此の手を放して下さい。放さなければ、家中聞こゆるやうな大聲を立て、誰かを呼ぶから。」

猛が些く躊躇する暇に、咲枝は執られた手を振解いて、畳の上へ轉がり出るや否や、襖をすつと明けて、次の間へと飛出した。

猛も續いて其の跡を追掛けたが、一生懸命に廊下傳ひに逃げてしまふ流石に夜ふけて人を呼起すのも如何と、逃場に迷つた咲枝は、宵の中に覺て置いた綱田の部屋へと驅込んだ。

「綱田さん。起きて下さい。後生ですから起きて下さい。綱田さん。揺起されて、綱田は始めて眼を覺まして驚いた。

「あなたは御嬢さまぢやありませんか。大層息を切つて、何う遊ばしたのです。」

「あの、私の部屋に居られませんから、夜が明けるまで、あなたの側に置いて頂戴。」

「部屋に居られないとは、何か危険な事でも出来たのですか。」

「其う。危険、大危険だわ。能く寝て居る私の所へ猛さんが来て、此の手を攫むんですもの。」

綱田は暫く途切れて、

「其う、分りました。山川さんのあなたに對する舉動が、何うも妙だと思つて居ましたが、成程、其うですか。しかし、乳母が居る筈です。」

「其の乳母にも眠薬を飲ましたんですつて。」

「山川さんがですな。成程危険だ。然し、お嬢さま。あなたと私と差向ひで、夜の明けるまで此處に居るのは、何だか穩かでありませんか。斯う致しませう。番頭を起して、あなたの寢床を何處か他の座敷

に取らせませう。」

「だつて、私ひとり居れば猛さんが又遣つて来るに違ひはないのよ。ですから、助けると思つて、私を此處へ置いて下さいな。私一夜さぐらの寝なくつても斯うして起きて居ますから。」

「では、私が起きて居ませう。そうして、斯う夜がふけると段々冷えますから、あなたは其の夜具を御召しなさい。」

「いわ、私澤山よ。氣の立つて居るせいか、斯んなに熱いんですもの。あなたこそ風を引いては悪いから、其のまゝ休んで入らつしやいな。」

「何うしまして、恩人の御令嬢に寒い眼を御させ申して、私だけ贅澤な真似は出来ません。」

「あら、あなたは又恩人の令嬢ですつて。あなたは私の兄さんも同然ぢや無くつて。」

「兄と姉なら尙さらです。兄が暖かい眼をして、妹に寒い思ひをさす事は、人情としても義理としても出来ないのです。」

「其んなに改まつて物を仰やるから、あなたは水臭いと言ふのよ。」

「しつ、静かになさい足音が聞こゆるやうですから。」

「わゝ、猛さんが追かけて来たんぢやなくつて。」

咲枝は顔色を變へて、綱田の傍へ身體を投げるやうに寄添うた。

(一四)

綱田は社長の白瀬から便りがあるまで福住に逗留すべき約束であつたに拘はらず、何故か、其の翌る朝、東京へ立つてしまつた。

令嬢咲枝は、乳母のお菊と共に停車場まで見送つたが、宿へ歸るとフアリと庭へ下りて、彼處此處を散歩して居る。其の足取りの急に歩出すかと思ふと、何を見るときもなしに、一つ處にチツと立停まつて、時々

「あんな事をされて、怒らない者はありませんよ。」
「其うか、僕が悪かつたよ。悪かつたから、僕は此の通り、改めて咲枝さんに詫をするさ。詫さへすれば、咲枝さんだつて免してくれらう。」
「何うだか、私知りません。」
「まだ怒つて居るね。泣いたり怒つたり、咲枝さんも大分神経過敏になつたやうだね。」
神経過敏と言はれて、咲枝は自分の秘密を言ひ中てられたものゝ如くギョツとした。
「猛は其のさまを見て敵を射落したかのやうに得意となつた。」
「咲枝さん。其うだらう。あなたは餘程神経が過敏になつて居るんだ。だが、咲枝さんの様子が、何うして一夜の中に其んなに變つたか、

溜息さへ漏らすのは、胸の底に何かの波が立ち騒ぐのらしい。三十分許を此んな動作で過ぎた咲枝は、頓て庭先の石にペタリと腰をかけた、何やら深き思案に沈んだが、何時しか双の袂を顔へ押當て、肩を顔はしながら泣出した。
すると後から微かに肩を叩いた者があるので、ハツと振返ると猛が立つて居る。
猛の顔には冷笑を帯びて居る。
「咲枝さん。何が悲くて泣いて居るんだ。」
咲枝は今まで打萎れて居たが、猛の顔を見ると同時に屹となつた。
「私が何うだつて、あなたの知つた事ぢや無くつてよ。」
「咲枝さんは嫌にツンケンして居るね。昨宵僕が彼んな徒らをしたから怒つて居るんだらう。」

「僕だけは事情を知つて居るのさ。」

「わつ、一夜さの中に……。猛さん。私そんな事はなくつてよ。」

咲枝が早口に言譯するを、猛は冷やかに打見遣つた。

「其んな事がないものか。僕は昨宵の始末を残らず知つて居るのだ。」

咲枝さんが、自分の部屋から駆け出して、何處へ行つたか。そうして、

其處で何ういふ出来事があつたか。乳母は知らなくても、僕には咲枝

さんの秘密が皆知れて居るんだ。」

「猛さん。あなたは可笑しな事をいふのね。私に秘密なんか無くつて

よ。だから、昨宵の事は乳母にも皆談してしまつたの。あなたが氣味

のわるい事をするから、部屋に居堪まらないで、綱田さん所へ逃げて

行つたんだつて。」

「其うさ。咲枝さんは綱田君の所へ逃込んだのだ。そうして、綱田君

と咲枝さんが……。いや、其の先きは言ふ事をよしにしよう。あんま

り咲枝さんの秘密を暴いちや悪いから。」

咲枝は暫く詞が途切れた。

「猛さん。私秘密なんぞありませんから、其の先きは、私の口から言

ふ事が出来てよ。夜が明けるまで綱田さんの座敷に居たんだわ。」

「其れも其うさ。そうして其の間に、咲枝さんと綱田君との間に起つ

た事が、咲枝さんを神經過敏にさしたのだ。」

猛は相手の顔を覗いて、さげしむやうに笑つた。

(一五)

箱根を急に立つた綱田景助は、新橋へ着くと、社長の白瀬の處へ、都合あつて歸京したとの旨を電話で知らせて、其處から築地二丁目の吾が家へ車を付けたは午前十一時過ぎである。

二月振で吾が家へ歸つて、何より先きに眼に着いたは、妻素路子の顔色が窶れて居る事なのだ。

「素路子。お前は何うしたね。大層頬の肉が落ちたぢや無いか。」

「其うで御座いますかね。私は些も氣が着きませんが。」

「久しぶりに見たから其うなかも知れんが、何うだね。父さま母あさまに御變りは無いだらうね。」

「父さまは日比谷公園を散歩して、歸りに御友達の所へ寄つて圍を打つて、今朝早くから御出ましになりましたし、母あさまも、慈善音樂會の切符運動をしなくては成らないつて、先程御出ましになりました。」

「其うか。では、別に御健康に變りは無いんだね。で、何うだらう。」

あれから、母あさまの御機嫌は。私が留守でお前に辛く御當りになる

やうな事は無かつたか。」

「いね。」

素路子は只た一言答へたきりだが、眼には涙ぐんで居る。

景助は眼早く其れを見て取つて、

「其うか。母あさまの御機嫌が宜ければ何より結構だが、餘計な事を私に聞かしては悪いと思つて、お前は隠して居やあせんかね。」

「決して其ういふ事は御座いません。父さまは勿論で御座いますが、母あさまも能く氣を付けて下さいますから。」

「其れが事實なら、私も斯んなに嬉しい事はありやせん。旅行して居ても、お前が責られて居やあせんか、何んなに口惜い思ひをして居やあせんか、と其ればかり私は氣にして居たんだ。」

良人が其れほど自分の事を思ふてくれたかと思ふと、素路子は嬉し悲

くなつて、涙の滴がホロリと頬を傳はつて流れる。

「お前は泣いて居るぢやないか。」

「わつ。」

素路子は慌て、涙を拭きながら「私何うしたんでせう。」

「素路子。お前は一體内端すぎるから行かんよ。自分に不愉快な事とか、苦痛な事とかあるなら、私に何も彼も打明けて御くれ。夫婦の間で包隠す必要はないのだ。其れを、私の耳へ入れては、私にまで心配さして氣の毒だなんて、遠慮されると、私はお前を怨みこそすれ、嬉しいとは思はんよ。」

「あなたは私が涙をこぼしたから、何か苦勞でもあつて、あなたに隠して居るごとも思つて入らつしやるのでせうが、其ういふ事は決して御座いません。其れより、あなたが御歸り遊ばしたら相談を致さうと

存じまして。」

「うむ、何の相談だか。其れを聞かう。」

「他ぢや御座いませんが、あの尾上様の御嬢さまの事で御座います。」

「尾上の御嬢さま。」

「其うで御座います。あの咲枝さんと仰やいます。」

綱田は妻の口から聞いた咲枝といふ名が、ヒツシと胸に響いた。

(一六)

「咲枝さんが何うしたといふの。」

綱田の調子の變つて居るのが、素路子には氣が付かぬ。

「其の咲枝さんを均の嫁にしては、何うだらうといふ談が持上りましたの。」

「わつ、均さん。お前の弟にか。」

「其うで御座います。實家では、何しろ尾上様は伯爵といふ肩書もあるんだし、其の御嬢様を御嫁に貰つた處で、とても釣合はぬ縁だつて尻込みして居ますけれど、仲人の方が色々に口を利いて、尾上様は伯爵でも、其んな華族ぶつた方ではない、極平民的な事が御好きな方だし、其れに、伯爵様は只今熱海とやらへ御旅行中ださうですが、奥様が有澤なら嫁に遣つても宜いつて、大層乘氣に御なり遊ばして入らつしやる、と斯様に申すんです。」

「つまり、咲枝さんの母様が、均さんの妻君にしたいと仰やるのだね。」

「それも仲人口ですから、當てには成りませんが、まあ、其んな事を申して居ますさうで。里の母も、先きさまが其ういふ有難い思召なら、伯爵家の婿さまになるのは、均の爲めにも、家の爲めにも、名譽な事だ

し、出来るものなら此の縁談を纏めたいが、其れには景助さんが、書生の時分には尾上様の世話になつて、家の様子や又當人の咲枝さんの氣性も知つて居られるに違ひないから、あなたが御歸り遊ばした上で、何うしたのか、相談してくれ、と斯様に母が申しますので。」

景助は首を垂れたきり、返事が途切れる。

「あなたの思召は何んなもので御座いませう。返事を急いで居るから、旅先から歸られたら、直ぐに相談して、あなたの思召を聞かしてくれつて、母はせいて居ります。」

「其う。」

景助は何だか言葉尻に威勢がなかつた。

「均さんの細君は咲枝さんに丁度似合つた縁だらうよ。」

「では、あなたも宜いと仰やるのですね。」

「其うさ。お前の里の有澤だつて、爵位こそ無いが、家柄は立派だし、さうして、均さんも大學を卒業した立派な文學士なんだもの。尾上伯爵の令嬢には適當な婿であらう、と私は信じて居るよ。」

「で、尾上様の方は如何で御座いませう。」

「伯爵の家庭が何うかと聞くのだね。」

「左様です。」

「私の恩人の尾上伯爵は、今でこそ老衰されたが、一度は文部大臣の椅子にまで着かれた國家の元老で、而も清廉潔白で温厚篤實の君子だ。夫人だつて、僕が書生をして居る時分には、自分の子のやうに氣を付けて下すつた、謂はゆる良母賢妻の見本といつても恥かしからぬ方だもの。其の家庭に育つた令嬢は、均さんの妻として實に立派なものだといふ事を私は斷言する。」

「あなたが其ういふ思召なら、其の事を母に知らせて、早速談を取極める事に致しませう。母も其れを伺ひましたら、何んなに悦ぶか知れません。」

此の間、何やら思案に沈んだ景助は、

「だが、素路子。」

「はあ、何か他に故障でもあると仰やるのですか。」

景助が返事に躊躇した途端に、

「おや、驚いた。お前は何時の間に歸つて來たんだね。」

年の頃は五十過ぎたと見えて、其のくせ皮膚に艶氣があつて、垢抜けのした、小さい丸鬚の老婦人が姿を現はした。

此の老婦人こそ、景助の養母に當る薩子なのだ。

「あつ、母さん。只今歸りました。」
「あつ、其うですかね。其れぢや、私と一足違ひだつたんだね。」
「父さまも母さまも御出ましたと聞きましたので、御部屋の方へは顔を出しませんでした。」

「あつ、何うせ其うでせう。私等は居ない方が宜いんだらう。歸るか早々夫婦つきりで、仲が睦しくて結構さ。」

「こんな嫌みは耳だこの出来るほど聞いて居るから、景助は驚かぬが、養母の忌はしい癖がまた直らぬかと思ふと、嫌な顔色になる。」

「いね、母さん。素路子から實家の事について相談がありましたんで。」
「其れは私も知つて居ますよ。均さんの御嫁さんの談だらう。」

「母さまは其れを何うして。」
「何うしてつて、先つきから立聽きして居たんだもの。尾上様の御嬢

さまを均さんの御嫁にしようといふんだらう。」
「親子の間に秘密のある譯ではないが、言はゞ素路子の實家有澤家の爲めに内輪の相談を、立聽きして居たを平氣で言つて居る母の卑劣さが情なくなつて、二人は顔を見合せた。」

「ねね、素路子。それも結構でせう。尾上様の御嬢さまが均さんの御嫁だと、有澤さんは華族様の御親類さ。そうして、お前は其の有澤から來て居る人なんだから、私なんざもう／＼頭が上らないんだね。」

「母さま。其んな事は御座いませぬ。有澤が伯爵様と親類になりましたも、私は矢張あなたの嫁で御座いますもの。」

「さあ、其の御嫁が華族様の娘御には姉さんに當るのだから、御前の見識はグツと高くならうといふものだ。私と父さまは土下座せねば成りませぬよ。だが、景助。」

「何で御座います。」

「お前は其の御嬢さまと均さんとが夫婦になるのを、結構な事だと御言ひのやうだが、聞けば均さんは、藝者ぐるひをして居るといふぢやありませんか。幾ら文學士で學問があつたつて、藝者買ひなんぞをするやうな人に、尾上家の御嬢さまを御嫁にして、其れが結構とは呆れ返つて物が言へないよ。お前までが好い加減な仲人口を聞いて、愈々興入の濟んだ揚句、均さんの不身持が尾上さまへ知れたら、お前だつて昔御世話になつた御恩に對しても、面目玉を潰さねばなりませんよ。」

「何、母さん。均さんが藝者ぐるひをするなんて。其れは世間の噂ですから、事實ぢやありませんまい。尤も、若い者ですから、付合には茶屋酒の一つぐらゐ、偶には飲みに行く事もありませんが……。」

「いわ、御黙りよ。お前が其んなに臭い物に蓋をしたつて、私あチャンと知つて居るよ。斯ういへば、餘り私のミエにも成らないが、私だつて昔は下谷で稼いで居た身體なんだ。下谷で此の節ごんな人が遊んで居るといふ事は、昔の朋輩で、今も藝者をして居る者や、御茶屋を出して居る者から、筒抜けに知れるのさ。だから、御前たちが知らないりや、私が言つて聞かして上げるが、均さんは新若葉屋の鶴松といふ女に夢中なんだとさ。」

(一八)

素路子の弟均が近ごろ下谷あたりで遊ぶといふ事は、景助もチラホラ聞いて居たが、其んなに大袈裟な事とは知らなかつた。扱は養母の意地わるな心から、針ほどの事を棒のやうに言觸らすのではあるまいか、と心の中に疑ひながら、

「其ういふ事は母さんから伺つたのが始めてゝすが、均さんが果して其んな不行跡を働いて居るなら、私から屹度忠告しなくちつや成りません。」

「あゝ、其うだとも。ミツチリ言つて御遣りな。景助。一体お前が餘りボンクラ過ぎるよ。私と言ふまで均さんの事を知らないなんて。」

「全く私が迂遠でした。兎に角、尾上伯との縁談は、均の行状を確めた上の事に致しませう。」

「其うですとも。うつかり談ばかり纏めて、跡で面目玉を潰すやうな事があつては、お前が極まりの悪い人になるんだからね。しかし、素路子。折角の宜い談を、私に悪氣でもあつて、均さんのアラを掘り出すやうに思つて御くれぢやあるまいね。」

「何う致しまして、母さまも末始終の爲めを思召せばこそ、其んなに仰やつて下さるので御座います。」

「お前が其う思つて御くれたと、私も言つたいけの甲斐があるといふものだが、年よりの癖に、若い者の縁談を岡焼して、邪魔を入れるやうに思はれちや割がわるいからね。其れは其うと、景助。私もお前に相談したい事があるから、素路子は鳥渡彼方へ行つて御くれ。何もお前に聞かれたつて悪い事ぢや無いが、まあ遠慮をして御くれ。」

「景助。相談つて他の事ぢやありませんが。お前も知つての通り、私の甥に當る彼の仙吉の事なんだ。」

仙吉といふ名を聞くと、何故か景助は眉を皺めた。

「彼れも純帳芝居で、何時までも下廻りをして居た所で、とても行末の見込みが付かないから、お前の手引で、會社の何かに遣つて貰ひた

いと思ふのだが、其れは學問があるといふのぢや無し、若い時から自
 墮落に育つて、會社なんぞで役にも立たない事は知つて居ますが、其
 處をお前の盡力で、受附でも何でもいゝんだから、私の甥は壯士役者
 のペイ／＼で御座いますといふよりも、會社員だといへば、何んなに
 私の肩身が廣いか知れないし、世間體も宜いと思ふので。」
 景助は暫く考へて居たが、

「其うですな。母さんが其んなに御頼みになるのを、無下に御断り致
 して濟みませんが、役者の下廻りを、情實の爲め會社員に採用したと
 言はれては、私の責任としても無論だし、會社其のものゝ信用上にも
 如何はしいと思ひますので。其れは俳優だといふので、一概に賤しむ
 のぢやありませんが、母さんの前ですけれど、あの人に就いては、此
 れまでも屢々宜くない噂を聞いて居るのですから。」

「此れまでの事を言はれては、私も一言はないんだが、其れにつけて
 も、私は何うか仙吉を一日も早く堅氣な身體にして遣りたいと思ふの
 です。傍が傍だから、善い者も悪くなると言つたやうな譯で、其れに
 會社へ遣つて貰つたら、自分も些しは其の氣になつて、自墮落が直る
 に違ひないのだから。」

「母さんの御意見は御尤もですが、只今申すやうな次第ですから、直
 ぐに役者を會社員にするといふ事は絶對的出來ないのです。」

「あゝ、其うかね。」

お薩は些く不機嫌の體で、

「お前が行けないと言ふものなら仕方がないが。では、景助。斯うし
 て御くれな。會社へ遣ふ遣はぬは別として、役者はよさしてしまつ
 て、當分この家へ置いて、私とお前とがミツチリ監督をしようと思ふ

んだが。」

(一九)

場末の小芝居で龍谷仙吉と番付に載せられて、何時も停車場へ出る仕出しの掏摸や、園遊會の來賓を勤めて居る。此れが景助の養母薩子の甥だといふので、折節綱田家へ出入して居る。素性の賤い綱田の老夫人に斯ういふ甥のあるのも不思議では無いが、臺所で奉公人たちの噂によると、實は薩子の縁者ではなくて、また薩子が綱田家へ入込まぬ前、川口といふ壯士役者の親玉株と御安からぬ關係があつたが、其の川口は病氣で死んでしまひ、其の時分、仙吉は川口の内弟子であつた所から、薩子が最負にして居るのだともいふ。兎に角、綱田家へ来る毎に、薩子から幾らか小遣をせびつて行くのが御極りで、

「あんな甥には困つてしまふ。」

と愚痴をこぼしては居るが、其のくせ尋ねて来ると、悪い顔をせずと自分の居室へ通させる。そうして、月に一度ぐらゐは、何時でも仙吉の出勤する如何はしい芝居へ、薩子が見物に出かけて、小屋の格に外れた祝儀なんぞを樂屋へ振替いて来る。

「龍谷さんは大奥様の甥だか色だか知れたもんぢや無い。」

とは出入の者までが口にする所だが、景助夫婦の耳にも其んな悪評が入らぬ事はない。幾ら養母が無教育な女でも、綱田用平といふ紳士の妻として、其ういふ淫らな事はあるまいと信じては居るものゝ、事實は兎に角、噂を立てられるだけでも苦々しいから、成るべく養母に龍谷を寄付けぬやうに忠告しようとは思ひながら、流石に氣むづかしい薩子の氣をかねて、今日まで打捨てゝ居た處へ、仙吉を會社へ備つて貰へぬなら家へ置きたいといふ養母の言分なので、景助は返事に困ま

つた。

「其れは、父さんが御承諾でせうか。父さんさへ御承諾ならば、私に異存のある筈はありませんが。」

「いねさ、父さんにはまだ言はないんだよ。お前さへ宜いと言つてくれれば、父さんは御人よしだからね。」

餘りに父を踏付けた物の言ひやうと、不快に思つた景助は、何時もの嗜みを忘れてカツとなつた。

「しかし、母さん。私だけの意見を申上げると、御氣の毒ですが、仙吉君を同居さすといふ事は得策ぢやあるまいと思ひます。」

「へい、其れは何ういふ譯で。」

「何ういふ譯といつて。仙吉君を會社員に出来ないと同じ道理ぢやありませんか。」

「へい、其うですか。お前や父さまは立派な御方だから、私の甥を一つ屋根の下へ寝かしては世間體が悪いといふのだね。あゝ、私の爲めには只つた一人の甥が、其んなに他人扱ひにされて。私だつて、父さまでも御めでたくなれば、お前と素路子とで好い加減にされる事だらう。」

「母さん。あなたの親族だからして疎外するといふ譯ぢやありませんが、仙吉君を家へ置いて御覽なさい。世間の誤解が一層ひどくなるのですから。」

「へい、誤解つて。世間で仙吉の事を何とか言つて居ますか。景助は其の先きまで説明する勇氣がなかつた。」

「何うですか知りませんが、誤解されては詰まらぬと言ふのです。」
「だつて、甥か叔母さん所へ居候になるのを、世間が彼れ此れ言はう

筈が無いぢやないか。」

「でも、私の常識で判断して、仙吉君を家に入れる事は不承知です。」

「養子のくせに、お前は大層な見識だね。其れではお前の勝手におしなさい。私は私の勝手にするから。」

薩子は甚く機嫌を損じて疊ざはりも荒々しく出て行つたが、入代りて素路子が入つて来た。

(110)

「あなたが彼の権幕では、結局龍谷を内へ入れなくちや成らんかも知れぬ。」

景助の顔には屈托の色が見ゆる。

「其うですね。一旦言出したからには、意地になつても自分の言分を通さ

うといふのが、母あさまの氣性なんですから。」

「先あ心配するには及ばない。何事も成行に任せるさ。まさか龍谷が内へ入つた所で、彼れ一人の爲に家庭を蹂躙されるやうな事もあるまいから。其れより困まつた事は、均さんの一件だ。母さんの仰やる事は、何うせ大袈裟だらうと思ふけれど、藝者の名前まで知れて居るんでは、全く事實がないんぢやあるまい。お前は何か其れに就いて、里の母さんから聞いた事は無かつたか。」

「母も其う申して居りました。近頃は均が何うもソワ／＼して、夜遊びをする様子で心配だが、早く嫁を取つたら其れも直らうから、是非尾上様の方の談を纏めたいと申して居りました。」

「其れも其うさ。年頃で妻君のないといふ事が、若い者には一番よくないのだから。だが、私の立場として、假染にも均さんが藝者を買つ

て居るといふ噂を聞いて居ながら、品行方正な男ですとは尾上伯に言へんのだから、先づ此の縁談の進行は暫く猶豫して貰ひたい。其のうちには均さんの様子も探らうし、又本人の意志を直接に聞いて、何うにか談を極める事が出来ようと思ふのだ。然し、里の母さんに其んな事を知らす心配なから、お前だけで含んで居て貰ひたい。」

「畏りました。母には何とか體よく申して置ませう。」

景助が歸京してから早々のイキサツは、一先づ此れで済んだが、景助の胸にはまだく濟まないものがある。其れは、龍谷が家へ入る事よりも、妻の弟有澤均が藝者買ひをするといふ噂よりも、恩人尾上伯の令嬢咲枝についての事である。自分の知つた限り、均は母の薩子が言ふ如く墮落して居ると思はれぬ。血氣に任せて些しは茶屋小屋を遊び廻つた所で、咲枝との結婚は、有澤家に取つても、尾上家に取つても、此

の上ない幸福だと自分は信ずる。自分が其う信ずる以上は、此の縁談を纏める爲に乗切つて幹旋すべき筈ながら、其う出来ないのは、昨夜箱根の福住での出来事——自分と咲枝との間に起つた關係である。咲枝はもう疵物だ。いや、自分が疵物にしたのだ。其れを義理ある弟の妻として推薦する事が、何うして出来よう。外つき養母が均の身體について非を打つたのを幸ひに、此の縁談を握潰してしまつた方が當然の道なのだ。然し、此の縁談だけを握潰した所で、自分が咲枝を疵物にした事は何時までも拭去られぬ事實なのだ。自分には素路千といふ妻がある。而も、藝妓娼妓を一時の慰みにすると違つて、良家の處女——大恩ある尾上伯の令嬢をして、其の操を破らしめたは何たる罪惡であらう。

景助は自分の良心に責められて、罪深き自分の身を咀つた。

其の夜、景助は褥に入つて、咲枝が枕元に泣臥したと見て夢が醒めた。夢が醒めてから、景助は些しも眠らなかつた。そうして、夜が明けるのを待兼ねて床を放れた。

何時もよりは早く朝飯を済まして書齋へ閉籠もつて居ると、社長の白瀬から電話が掛かつたとの事で、電話室へ行くと、白瀬自身が出て居る。箱根へ新倉が電報打つたのは、左したる事でも無いから、社のごとは心配に及ばぬ、今日は早速社へ出勤してくれ、委細は會つて談をするとの事で、電話が切れてしまふ。

一體景助の従事して居る大日本製油會社には、株主の間に黨派があつて、其の軋轢が屢々起る。今度社長の白瀬が景助と一所に關西へ旅行したのも、一つは營業上の取調とは言ひながら、今一つは此の株主間

の感情を融和さすのが目的であつたのだ。だから、箱根へ新倉重役より届いた電報を見て、白瀬も景助も例のゴタ／＼が起つたものと信じたのであるが、さて、景助が出版社、白瀬社長と新倉重役とから仔細を聞くと、ほんの瑣細な事件で、庶務の下廻りが千圓ばかりの金を持って逃げたので、其の處分について社長の意志を確める爲め、箱根へ電報を打つたとの事である。

「といふ譯だから、安心したまへ。」
重役室へ二人が残つて差向になつた時、新倉重役は莞爾しながら景助に言つた。新倉といふは、景助が學生時代からの親友で、今でも氣の置けない同志である。

「しかし、新倉君、株主間の軋轢といふものは早晚破裂せんきや成るまいと、私は思ふ。」

「僕は白瀬さんが社長の間は、彼んな圓滿な人だから、大丈夫だらうと思ふが、何うとも言へないね。一體その衝突といふものが利益問題ぢや無くて、根本の感情が齟齬して居るんだから。」

「其うさ。だから早晚破裂を見るに違ひない。其の破裂の起つた時が會社が死活の時なんだ。吾れくも大いに今かる覺悟して置かんけりや成らんよ。」

「君は思慮深いから、何時でも物を先きから先きと考へて居るが、僕の流義は其うぢやないさ。何事も天命だ。天命に對しては人間が幾らあせつたつて仕方がない。だから、出たところ勝負で、其の時に何うにかすれば宜いと思つて居る。」

「私は君のやうに樂天的には何うしても成れん。」

「全く君のやうな眞面目な性質としては、其うだらう。然し、君も大

いに變つたものさね。吉原で竹澤さんくんと持囃されて居た頃は、矢張僕と同じノンキ主義だつたが、其れにつけて、社長から僕は悉皆聞いたよ。箱根でお辰に會つたといふぢやないか。」

「では、白瀬さんが君に談されたのか。私は實に何とも言へぬ嫌な氣持になつた。」

「其うだらう。大層變つて居たさうだね。して見ると、人間といふものは何うなるか知れない。其處が矢張僕の謂はゆる運命だ。君の如き放蕩家が、今では斯ういふ謹直な君子になるかと思へば、お辰のやうな内氣な女が其んなアバ摺になるんだもの。僕も罷り間違つたらノンキ主義を廢業して厭世家にでも成るか知れない。」

「新倉君。君ばかりは大丈夫だよ。」

「其うかね。矢張華嚴の瀧へは不向きで、池の端あたりで沈没する方

か知ら。む、池の端といへば、君の義弟の均君について珍談があるぞ。」

(二三)

「均」といふ名を聞いて景助は膝を進めた。

「均が何うしたといふのだね。」

「均君が下谷で盛んに遊んで居る事を君は知つて居るか。」

「何でも鶴松といふ女に熱くなつて居るといふ事を、チラリと聞いたんだが、一體それは事實なのかね。」

「事實とも、大事實なんだ。でも、女の名前を君が知つて居るのは、

網田景助未だ衰へずといふべしぢや。」

「そうして、珍談といふと、均が其の藝者に欺まされても居るのか知ら。」

「所が、其うちや無い。藝者の方が本物なんだから頗る御談になるのだ。一體鶴松といふ女は、未だ拘へないので、我儘の出来る身體ぢや無いんだが、其れが均君の爲めに夢中になつて、随分抱主も手古摺つて居るといふ噂だ。」

養母の薩子から聞いたわけでは、虚實いづれかを疑つて居たが、新倉が其ういふ上は、矢張均は墮落して居るに違ひない。そうして、女の方が其ういふ意氣込では、大分事がむづかしい。妻の實家に取つては何たる心配事であらう、と思ふと共に、咲枝の縁談を毀す爲には好い口實が出来たので、差當つて胸の中の重荷を下したやうな心持になる。「其うかね。能く聞かしてくれた。いづれ均には私から忠告をしてやらうと思ふんだ。」

「君。其んな事はよす方が宜い。忠告なんぞの利目があるものか。現

に昔の君だつて其うちや無かつたか。同窓の友が幾ら意見しても、放蕩をよさなかつた君が、今では待合といふ所は停車場より他に無いといふやうな顔をして居るちや無いか。若い時の道樂は、他からの意見ならんぞで止むものちや無いが、其の代り自分で馬鹿々々しいと氣が付けば自然に止んでしまふ。何時までも其處へ氣が付かないのなら、其奴は本當の馬鹿ぢやから仕方がない。何方にしても、當人のしたい三味をさすより他に手のつけやうは無いのだ。」

景助も其れくらゐな事は自分で知つて居るが、其れを新倉の口から聞くのが、咲枝の縁談を壊す爲め味方を得たやうな氣になつて、何となく心地よく耳に響く。

新倉が言ふ通り、他からの意見ぐらゐで心の改まらぬ均に咲枝を娶はす事は、誰の眼から見ても穩當でない。その穩當でない結婚を、自分

が故障を入れるのは、良心に一點の疚まじき所はないのだ。そうして、故障を入れれば、既に自分の汚した處女を弟に娶すといふ罪惡から免るゝ事が出来るのだ。景助は斯う思ふ片端から、義理ある弟の放蕩に心を痛めるよりも、其れが自分の爲めに都合よい口實となつたのを悦ぶやうな自分の立場を餘りに淺ましく思つた。

すると重役室のドアが出しぬけに明いて、給仕が入つて來た。

「網田さん。あの番町の尾上といふ方から御電話です。」

(二三)

電話は尾上伯爵夫人からであつた。令嬢咲枝は景助と同じ日の夕方に東京へ歸つたが、是非とも遇つて相談したい事があるから、都合がよければ今日にも宅へ來てくれとの意味である。

景助は此の電話を聞いて些か胸を轟かしたが、會社の引けがけに、番

町の尾上伯爵邸を尋ねて行つた。

伯爵夫人は何時もの通り莞爾かに出迎ひて、

「景助さん。忙しい處を呼付けて本當に濟まないのねえ。」

「何う致しまして、折頃は御無沙汰をして濟みませんでした。伯爵様は熱海へ御越しのように伺ひましたが、未だ御歸りに成りませんのですか。」

「はあ、熱海の方はまだ一月ぐらゐ掛るだらうと思ひますが、咲枝だけは昨日の夕がた歸つて來ました。」

「其のやうに先程電話で承りましたが、御嬢さまには箱根で御眼にかゝりました。」

「嬢も其う言つて居ました。景助さん。其れについて相談があるんだがね。お前さんの奥さんの御里は確か有澤といひましたね。」

「其うです。」

「其の有澤の息子さんに、咲枝を遣つては何うだらうといふ相談があるんで。其れなら、景助さんの縁引なんだから、お前さんに骨を折つて貰はうと思つて、御呼び申したので。熱海へは未だ何とも言つて遣りませぬが、私だけの考へで、此の縁談は至極宜いと思ふんだけれど、何しろ當人の咲枝が煮切らない返事をするので。」

「では、御嬢様は。」

「はあ、昨日箱根から歸つたので、斯うくだからと詳しい談をしたんですけれど、何うしたのか、咲枝は善いとも悪いとも言はないから。景助さん。お前さんは咲枝と幼い時からの合口だし、お前さんから咲枝の心底を聞いて貰ひたいと、斯う思つて。」

「奥さん。然し、私の意見を申しますと、御嬢さまと均との結婚は賛

成が出来ません。」

「何うせお前さんは其う御言ひだらうと思つて居ました。だつて、均さんは下谷で藝者に凝つて御出だらう。」

「奥様。あなたは其れを御存じですか。實は均は放蕩者ですから、御嬢さまの良人としては何うかと心配して居るのです。」

「まあ。御前さんまでが其んな事を言つて居るの。若い時に道樂をするのは、其れや男の當り前ぢやありませんか。均さんが藝者を買ふ事なんざ、私何とも思つては居ません。咲枝を御嫁にすれば、其んな道樂は直ぐにも癒つてしまふだらう、と私は思つて居ます。其れについて、お前さんに頼みたいのは、咲枝に何うか此の縁談を承知してくれるやうに。咲枝はお前さんのいふ事なら、何でも聞くと云つて居ますから、景助さん。其の事を咲枝に説いて下さいな。」

(二四)

均が放蕩を言立てたら、咲枝の結婚談がばれて仕舞ふだらうと思ひのほか、藝者買ひなんぞは何でもないといふ伯爵夫人の度量の廣さに、景助は鳥渡返事にまごついた。

「奥様が其ういふ思召なら、此の上私は故障を申しませぬが、然し、均は私の義弟でありますだけ、愈々御嬢さまが御片付き遊ばした上で、兎角の事がありましたは、私が伯爵様へ面目ない譯になりますので。」

「御前さんが心配するのは無理もありませんが、お前さんが進まないものを、私の方から御頼みをするんだから、万一結婚した後で苦情が出来た處で、其れをお前さんには責任を負はせはしません。咲枝を御嫁に遣つても、均さんが矢張藝者買ひを止めないで、家庭が治まらぬ

「といふんなら、其の責任は私が引受けるから、安心して御くれ。」
夫人に此處まで突込まれては、景助も返す詞に窮した。

「其うですが。奥様が其う仰せで御座いますなら、私からも何とか御嬢さまに申して見ませう。然し、母子の御間柄で御返事を遊ばさないものを、私が兎や角申した所で、ダメだらうと存じますが。」

「いね、お前さんから言つて貰ふのが、咲枝には一番利き目があるのです。景助さんは幼い時からの御友達で、兄さんのやうに思つて居つて、何時も其う言つて居ますから。全く咲枝は私のいふ事は聞かなくても、お前さんに言はれた事なら、屹度承諾するに違ひないのです。」

「まさか、其うでも御座いますまいが。では、御嬢さまに御眼にかゝりまして、思召しの程を伺つて見ませう。」

「あゝ、何うか其うして下さい。咲枝を此處へ呼んで来ても宜いけれど、其れでは改まり過ぎて談が出来にくからうから、離れの部屋へ行つて能く談をして下さい。」

「では御免を蒙りまして、御嬢さまに御眼通りを致しませう。」

景助は咲枝の部屋と極まつた離座敷へ足を進めたが、今更咲枝に顔を合はす事さへ何となく後めたく、初心のやうに顔をポツとして部屋へ入ると、何時もなから遠慮會釋もなく出迎へる咲枝が、其れを見て、是れも赤らむ面を俯向きになつた。

「御嬢さま。大層急に御歸京でしたね。」

「はあ、猛さんがうるさくつて仕様がなものですから。」

應對の言葉さへ何時ものやうに甘つたれすと、他人らしく改まつて居る。

「其うですか。實は、先程奥様から、あなたが御歸京遊ばしたといふ電話が掛りましたので、御伺ひ致したやうな譯ですが、あなたの御一身上について、母さまから御聞及びになつた事が御座いませう。」

咲枝は暫く返事に躊躇して、

「はあ、母から聞きました。私に有澤へ御嫁に行けといふ事でせう。」

「で、あなたは其れを何う思召すのです。」

咲枝は再び躊躇したが、

(二五)

網田は先きを越されてハツと行詰まつたが、

「あの、私の意見を聞かうと仰やるのですか。私はあなたが有澤へ入らつしやるのを、結構な事だと信じて居ります。其れに、奥様が大層

乗氣になつて御出でますから。」

「では、網田さん。あなたも御嫁に行けと仰やるんですね。」

「其うです。」

網田は微かに答へた。

「網田さん。あなたは其んな心で入らつしやるの。」

咲枝の聲は顫へた。

「母さまが何と仰やつても、あなたまで御嫁に行けとは餘りだと思ひます。私もう處女ではないんですもの。」

網田は手紙に手を觸られたやうにハツと思つた。

「御嬢さま。何うか私の罪を御免し下さい。何うして彼んな罪惡を犯したかど、昨日も、昨夜も、現に此の今でも、私は良心の呵責に苦しんで居ります。」

「いね、綱田さん、其の罪は私も同じです。私も矢張り良心に責められて、夜も寝ないで煩悶して居ますが、犯した罪は矢張り罪だから仕方がないと諦めて居ます。」

「そうして、卑劣のやうですけれど、彼の秘密はあなたと私より他に知つて居る者は無いのですから、二人の間に秘密を葬むつて仕舞ひませう。」

「いね、綱田さん。あなたと私の他に、今一人あの秘密を知つて居る者があります。」

「では、乳母のお菊ですか。」

「其うぢや無いの。お菊は知らないけれど、猛さんが知つて居るのです。」

猛と聞いて、景助もギョツとした。

「猛さんが、何うして知つて居るのでせう。」

「何うしてと言つて、あなたが昨日の朝箱根を立つてから、猛さんが私に色々な事を言つたんですもの。」

「何んな事です。」

「咲枝さんが神経過敏になつて居る譯は僕が知つて居る。綱田君の部屋へ逃込んで、二人の間に起つた出来事が神経過敏にさしたんだつて。」

「猛君が言つたのは其れだけでせう。」

「そうして、僕は何にも知つて居るけれど、人の秘密を暴いては悪いから黙つて居るつて。」

「何うせ其んな事でせう。つまり、猛君は、其うぢやあるまいか、と自分分推測した事を、事實のやうに言觸らして、あなたを脅かして見た

んでせう。」

「でも、猛さんは何も彼も知つて居るが、人には談さないから、其の代りに自分と結婚しろ。其れが不承知なら、父さまや母さまの前で、此の秘密を暴いて仕舞ふと斯う言つて居ます。」

「其れで、あなたは何と言ひました。」

「私、どこまでも覺わが無いつて言張つたけれど、餘り猛さんがうるさく附纏ふから、乳母と二人で、直ぐに東京へ歸つて來たのです。」

「其うですか。猛君は屹度これから後も同じ口實で、あなたを脅迫するでせうが、覺わが無いと言へば其れまでです。そうして、猛君だつて、あなたに對しては人に言へない不埒な態度をせられたのですから、自分の耻を吹聴するやうな事は滅多になさらんだらうと思ひます。私も其れは知つて居ますから、猛さんが此の上うるさく言へば、反對に

猛さんの事を言付けるつて、其う言つて遣るわ。」

「其うですとも。ですから、つまり吾々の秘密は矢張吾れ〜の間に葬むる事が出来るのです。そうして、秘密は葬つてしまつて、正當な結婚をなさる事を、あなたの幸福の爲めとして私は希望致します。」

「でも、綱田さん。處女でない者が、處女と詐はつて御嫁に行くのは二重の罪悪なんでも、又あなただつて、御自分の弟へ處女でない私を勧めて、良心に疚くないと思召すの。」

(二六)

景助は一本參つた。

「成程、あなたには私が卑劣のやうに見わるでせう。私も其の事を心苦く思ひました。そうして、義理ある弟とあなたとの結婚を妨げようと決心しました。」

「では、御嫁に行けなんて、私に仰やる事は無いわ。」
「實は均が放蕩をして居るといふ事を聞きましたので、奥様へ、其れを口實に、均との結婚は御嬢さまの爲めに不利益でせうと申しましたが、奥様は、其れくらゐな事は頓着せぬから、是非私からあなたに勧めてくれと仰やるので、私の決心が變つてしまひました。成程、處女でないあなたを均の妻に勧めるのは、卑劣のやうですが、あなたの行末、あなたの長い前途の爲には、何うあつても此の秘密を葬らんけりや成らん。二人の中の秘密を葬つて、あなたに結婚を勧めるのは、其の結婚の相手が均であるなしに拘はらず、矢張卑劣な所業に違ひない。罪深き私が執るべき道は、其の卑劣な所業よりほかには無いのですから、均との結婚を御勧め致します。」

「綱田さん。私、決心して居ます。其んなに二重の罪惡を犯したくは

ありませんから、私、有澤さんに限らず、何處へも最早御嫁には行きません。」
「では、一生獨身で暮らすと仰やるんですか。」
「だつて、其れより仕様がありませんもの。あなたには素路子さんといふ立派な奥さんが入らして、私が何うする事も出来ないは知れ切つた事だし、そうして、他へ御嫁に行く事の出来ない身體なら、獨りで暮らすのが私の運命だと諦めて居ます。」
咲枝が堪まらずなつてシク／＼泣出すを、景助は押止めた。
「其んな聲を立て、奥様に知れては大變です。無邪氣で、快瀾で、世の中の苦勞といふ事は夢にも知らなかつたあなたに、斯んな涙を流さすのは、誰の所業でもない、皆私の犯した罪惡ゆゑだと思ふと、私は死んで御詫をするより仕方がありませんが、何うか過去の事は免し

て忘れて下さい。そうして、今仰やつたあなたの決心を翻して、何うか結婚なすつて下さい。」

「いな、あなたばかりの罪ぢや無い事は、先つきも言つた通りですから、あなたは恨まなくつて、私の罪で私が責められて居るのだと思つて居ます。ですから、私の決心だけは止めずに居て下さい。そうして、母さまには何とか言つて、あなたの仰やつた通り、放蕩な人の御嫁には嫌だつて、此の談を断はつて頂戴。」

(二七)

咲枝と景助とが此んな對話をして居ると、丁度同じ時間に池の端の敷島といふ待合で、差向ひになつた男女がある。男は有澤均で、女は新若葉屋の鶴松だ。

均も鶴松も話が理に詰んで、座敷が陰氣だ。

「有澤さん。あなたが今仰やつた事は嘘ぢや無いでせう。」

「僕が嘘なんぞ吐くものか。母が何んなに勧めたつて、僕は細君なんか娶りやせんさ。」

「でも、其う行かなかつたら何うします。向うは華族様の御嬢さまで、學問もあれば器量も美しいと言ふぢやありませんか。」

「其れは其うさ。然し、爵位とか名譽とかい、愛情と何の關係があるのだ。そうして、咲枝さんといふ令嬢は如何にも美人さ。父さんが文部大臣であつたくらゐだから、教育も充分にあるだらう。然し、幾ら美人でも、教育があつても、お互ひに愛情といふものが無ければ、何うする事も出来んぢや無いか。」

「有澤さん。では、私とはお互ひに愛情があると仰やるの。」
「其うぢや無いか。お前は其う思はんのかね。」

「あら、私は其う思つて居ますけれど、あなたの心が何うか知らと思つて。」

「つまり、お前は未だ僕を疑つて居るのだ。疑ぐつて居るのは僕に水くさいのだ。」

「あなた。怒つちや嫌よ。私の身になれば、水くさくは無くて、邪推や僻みが生ずるのは無理で無いぢやありませんか。醜業婦と世間から賤められる藝者風情で、あなたのやうな立派な御身分の方と、一旦は斯んな嬉しい仲になつて、未始終まで添遂げられるか何うだか。其れを思ふと私は心細くなつて、つゝ嫌みを並べたり、愚痴を言つたり、あなたに濟まない事は知つて居ますけれど、此の間も家の姉さんまでが、有澤さんの事は今のうち思切の方がいゝ、奥さんに成れると思へば、其れは御前の自惚なんだ、よしんば有澤さんだけは、若氣の餘り其ん

な心で入らしつても、親兄弟もあれば御親類もある、傍に居る其んな人たちが、世間へ對しても、藝者を内へ入れるやうな事は成さるまい、だから末へ行つて口惜い思ひをしようより、今のうち別れた方がお互の爲めですつて。姉さんから其う言はれたつて、私あなたを疑ふ譯ぢやありませんが、成程傍から見れば其の通りで、あなたと夫婦になれるなんて思つて居るのが間違なんだ。よしんば、此の末あなたに見捨てられたつて、其れは恨みはしませんが、何故藝者なんかに生れて来たらうと、自分で自分の身を恨みます。」

「お前は僕を疑はんと云ふ口の下から、矢張僕を疑つて居るんだ。誰が何と言つたつて、僕の決心さへ變はらなけりや大丈夫だ。實際僕は何んな事があつても、お前に言を食むやうな事は斷じてしやあせん、だから、今度の談だつて、僕は始めから相手に成らんのだ。肝腎の僕が

其うなんだから、母だつて思切るに違ひないんだが、只心配なのは、僕の爲めに義理の兄貴に當る綱田といふのが、昨日旅から歸つて來たので、其の兄貴の意見ひとつで、此の問題が消ぬるか燃ぬるか決するんだ。」

「では、其の兄さんが、是非奥様に御貫ひ遊ばせと仰やつたら。」

「でも、大丈夫さ。兄貴だつて、僕の意志を任せさす事は出來んのだから。」

(二八)

同じ敷島の離座敷に、人待ち顔な浴衣がけの男が居る。褥の上に大胡座を掻いた所が、何となく下卑て、細く剃込んだ眉毛と油に光つた頭は、當世風のにやけ造りだが、臉の切れ目が長いのと、何うかする塗端に、眉の間に深い皺を寄せるのが、俗に劍難とかいひさうな人相を示

して居る。

先つき取寄せた巻簾を三本ばかり吹かしても、まだ待つ人が見ねないといふ様子で、氣のない大欠伸を二つばかりして、椽先へ立つて行つた。庭には鳥渡氣取つた植込みがあつて、金雀枝の花の黄色のが一きは眼に立つが、其んなものには振向かうともせぬ。飛石傳ひに通はれる母屋の方を眺めて「馬鹿に待たしやがる」といふやうに舌打をしたが、亞鉛の塚を隔てた隣の家で、小鳥の聲がチユツといふだけであつた。やがて、男はちれ氣味になつて、無暗に手を叩くと、飛石にガサツな庭下駄の音がして、顔の生つ白い、肩の怒つた女中が遣つて來た。

「龍谷さん。何か御用ですか。」

「御用があるから手を叩いたんだ。あの電話をかけてくれたまへ。」
「綱田さんの御屋敷へでせう。」

「其うよ。斯んなに遅くなる筈ぢや無いんだに。」
「何うも御待遠さま。」女中は冷かすやうに言つた。
「おい、お前は何を笑つて居るんだ。冗談ぢや無い。」
「本當に奥さまは何うなすつたんでせうね。」
「だから、電話をかけておくれといふんだ。」
「宜う御座んす。直ぐ掛けますわ。だが、龍谷さん。」
「何だね。」
「今度の狂言は大層面白う御座んすつてね。」
「面白い面白くないか知らないが、仕出しが多くて舞臺がだれるつて新聞屋の野郎めが餘計な事を書いたもんだから、膽つ玉の小さい太夫元が其れを氣にして、成るべく仕出しを食つてくれと吐かしやがる。だから、己らの見せ場が無くなつて、此方は些とも儲からないんだ。」

「あらまあ。でも、舞臺へ多く出ない方が身體が樂で宜いぢやありませんか。」
「馬鹿言つて居らあ。」
「其うですかね。私なら、同じ物を貰つて、些しでも動かない方が割だと思ふわ。」
「ふんむ、おさんごんと役者と一所に見られて堪まるものか。」
「おさんごんは酷くつてよ。」
「何でも宜いから早く電話をかけてくれたまへ。」
「宜う御座んすとも。そうして、あなたの御名前を言つても構はないつて。」
「構はないとも。僕は仙吉ですが、叔母さんに電話口まで出て下さいつて。」

「叔母さんは宜つたわね。」

「だつて、己らの叔母さんぢや無いか。」

女中が何か言はうとした途端に、又飛石に足音が聞これたので、二人が一時に其の方を振向いた。

「あら入らしつてよ。」

「叔母さん、大層遅いですな。僕は先つきから待ち草臥れてしまひました。」

「其うかね。遅くなつて悪かつたのね。」

當世流の白いシヨールを疊んで、座敷へ入つて來たのは、網田景助の養母薩子である。

「何うも、叔母さん。其の後は御無沙汰を致しました。」

男がしかつめらしく挨拶をするのを、薩子は打消して、

「仙ちゃん。お前は何うしたんだよ。此處へ來てまで、叔母さんくは餘り色消し過ぎるぢや無いか。」

「奥さん。全く其うですね。そうして御屋敷へ乗込むといふ一件は彼れから何んな段取になりましたらう。」

(二九)

「段取どころぢや無い、大行惱みなんだよ。」

「其うですか。」

「景助めが、何時もは何にも言はないくせに、今度は何うしたのか、馬鹿に鼻息が荒いのさ。お前見たいなベイク役者は、幾ら私の甥だつても、世間體が悪いから、内へ入れる事は出來ないと斯う言ふんだ。私だつて、其う言はれると口惜くて成らないけれど、お前も餘り意氣地が無過ぎるよ。何うしてもつとわらい役者になれないんだらう。」

歿つた川口が、龍谷なら好い役者になれる見込がありません、手筋が悪くからつて、始終言つて居たが、私にや最負目か知らないが、今すこしは巧くなるだらうと思つて居たに、何時まで経つても、仕出しばかりで、筋の通つた役が付かないぢや無いか。」

「飛んだ所で小言を食つて、全く弱つて仕舞つたな。何うせ、歿つた先生と私とは比べ物になりませんや。」

「ふむ、お前はおつう言つて居るよ。川口さんとお前と比べ物に成らない事は知れ切つて居るが、今すこし舞臺に身を入れたら、見物の眼にも付かうし、見物の眼にさへ付けば出世も出来ようぢや無いか。所が、お前は舞臺なんざ其つち退けにして、女を欺す事や博奕を打つ事にばつかり凝つて居るから、立身も出来なけれや、世間からも馬鹿にされるんだ。内の景助も其う言つて居たよ。一概に役者を入れるのが

悪いんぢや無いけれど、お前については、宜くない噂が度々あるから其れで行けないんだつて。」

「では、奥さんと私の事を感附かれたんぢやありませんか。」

「いね、其れは大丈夫だよ。私の甥だてんで通つて居るから。」

「其れなら結構ですけれど、して見ると、つまり私は御屋敷へ入込む事が出来んのですな。」

「景助は何んでも不承知だと斯う言つて居るが、何も景助ばかりの家ぢやあるまいし、私が一旦言出したからは、お前を是非内へ入れようと思ふなら、入れる手段は其りや幾らでもあるさ。成程、綱田家の當主は今の景助に違ひないが、彼れは跡から入つた養子なんだもの、私がかうまく旦那を言ひくるめて、都合で仙吉を内へ入れますから、景助にはあなたから其う言聞かして下さいと、此方から高飛車で出れば、

此の上、景助から故障をいふ事は出来ないだらうと思ふのさ。」

「其れは其うでせうけれど、實際私の内へ入るのが不承知であるものを、無理に割込んだ所で、詰まらないのは私ぢやありませんか。」

「では、矢張下宿屋に轉がつて、浮氣がしたいと斯ういふんだね。」

「奥さん。其んな譯ぢやありません。御屋敷へ入れて戴けば、其れは結構な事はないのですが、私が入つた爲めに、御主人の氣持を悪くするようでは面白くありませんから。」

「何うせ景助の機嫌は悪いに極まつて居るが、其んな事にびく付いて堪まるものかね。お前には私といふ立派な後楯が付いて居るんだよ。」

(三〇)

離座敷に何時しか話聲が途切れたが、

「仙ちゃん。では、其のつもりで居ておくれ。」

「宜うがす。其れでは、奥さんからの御便りを待つて居ます。」

「そうしてね、言ふまでも無い事だが、屋敷へ來て纏纏を出しては行けないよ。」

「大丈夫ですよ。何處までも叔母さんのつもりで、其處はあなたにけなされた通り、ペイくでも舞臺の功でさあ。」

「妙な處で威張つて居るのね、其れでは、仙吉。私もう歸るよ。」

「何うか、叔母さん。御大事に入らつしやいませ。」

「おほ、飛んだ芝居の御浚ひだね。」

「私より奥さんの方が一枚上でさあ。」

「煽てちや行けない事よ。」

「全く其れに違ひないんですもの。」

「其うかね。では、一所に出ちやあ人眼がうるさいから、私だけ先き

へ行かうよ。」

「其うなすつて御くんなさいまし。私は一足おくれて出かけます。」

「跡へ残つて水天なんぞ呼ぶんぢや無いよ。」

「其の御心配なら御無用ですよ。貰買ふ錢も無わんですから。」

仙吉は後の文句に故と力を入れて言つた。

「おや、其んなに遠廻しに言はなくつて宜いぢや無いか。又小遣をくれと言ふんだらう。」

「何時も濟みませんが、全く衰のお錢も無いんです。」

「お前のズボラなのは、本當に呆れてしまふよ。」

「だつて、ペイ〜役者が給金だけで何うなるものですか。」

「だから私が仕送りをして居るのよ。此の間のが最早なくなるなんて、お前は柄にない藝者買でもしたんだね。」

「柄にないは驚きましたね。實は其んな浮いた事ぢや無くて、花を引いてすつかり取られてしまつたんです。其の方なら宜いでせう、奥さんだつて嫌ひぢやありませんから。」

「嫌にゆすりがましい事を言ふぢや無いか。では、仕方がないから、此れだけ上げて置くよ。」

紙入から薩子が取出した札を受取つて。

「五圓一枚ですか。」

「其うさ。」

「大層きざむぢやありませんか。」

「それくらゐで、お前には丁度いゝんだよ。餘計持たすと身が持てないからさ。」

「持てないか何うだか、餘計下すつた事もないくせに。」

「まだ其んな減らず口を言つて居るの。不足なら返して御くれ。」
「何、それには及びません。」
「其れなら、初めつから文句を言はずと納めれば宜いものを。だが、お前は私の事を、お婆さんのくせにシミツたれだ。と心の中に思つて居るだらう。」

「何うしまして、其んな事は……。」

「思はないと言ふのかわ。いね、思つて居るに違ひない。第一、本人の私が其う思つて居るんだもの。何うせ私はお婆さんさ。ね前はペイくでも、役者で年下なんだもの。お前と遊ぶには此方が損をしなくちや成らない事は知つて居るが、馬鹿な金を遣つて、お前に浮氣の元手を入れてやるのも業腹だから、斯の通りチビく刻むんだよ。其の代り、仙ちゃん。お前を屋敷へ乗込ました上では、今に果報な目に會

はして上げるから、宜いかわ。其れを楽しみにしてお出で。」

「何うか一日も早く御頼み申します。」

「宜いよ。萬事は私の胸に心得て居ますよ。では、左様なら。」

仙吉が一所に立たうとするを

「いね、見送りなんざよしにして御くれ。矢張人眼がうるさいから。」

薩子は庭下駄を突掛けて、飛石から母屋の椽先へ上らうとすると、丁度二階の櫓子をトンくと下りて來たのは嫁の弟有澤均なので、ハツと驚いて自分の袖で顔を隠した。

(三三)

「あら、最早お立ちで御座いますか。」

肥つた女中が追つかけるように送出して、下駄を並べるを、薩子は急いで突掛けて、車に乗るや否や、母衣を深く下した。

「鳥渡、お前。」小聲で女中を母衣の傍へ呼寄せて、「先つき二階から下りて来たお客は、有澤さんといふんだらう。」

「如何で御座いますか。藝者衆が連れて参つたのですから。」

「其の藝者は鶴松といふんだらう。」

「奥様は能つく御存じで入らつしやいます事ね。」

「其れでは此の家へ始めての御客なんだね。」

「其うで御座いますよ。」

「あの、向うでも私の事を聞くか知れないから、何處の方だか知らない、と其う言つて御くれ。そうして、龍谷と二人だなんて、言つこなしよ。」

「大丈夫で御座いますとも。」

「あの、此れは些だけれぞ。」

薩子は紙入から取出した一圓札を、紙に包んで女中にくれてやる。

「おや、毎度戴きまして相済みません。車屋さん。御供は此方ですよ。左様なら。」

「女中の聲を後に、車は威勢よく曳出したが、故と遠廻りをして、須田町の停留場で梶棒を下さして、其處から電車で、築地の屋敷へ何喰はぬ顔をして歸つて來ると、時計がもう十一時を廻つて居る。」

「母あさま。大層御遅う御座いましたので、御案じ申して居りました。」

出迎ひた新夫人の素路子は、全く姑おもひに言つたのであるが、歴に疵持つ薩子には、其れが當て摺りのやうに聞こゆる。

「お前も此の節の火には似合はない。まだ十二時前だあね。世間へ出て働く人にはまだ宵の口だよ。」

「でも、お供も御連れ遊ばさなくつて。途中で不用心だと存じまして。」

「心配おしで無いよ。私みたいなお婆さんに、出齒龜だつて相手にするものかね。」

身分に似合はず、何時も斯んな口を利くので御里が知れてしまふのだ。「そうして、おつ母さま。御飯は。」

「もう澤山よ。出先まで食べて来たんだから。」

薩子は直ぐと夫の部屋へ顔を出したが、六十許な、頭の禿げた、柔和さうな老人が、景助の爲めには養父に當る用半なので、丁度机に對つて、何やら書見に耽つて居た。

「あなた、只今。」

「ねらう、遅くまで飛廻つて居つたのぢやな。」

用平が詞の底には、不満の意味が籠もつて居る。

「其うですわ、飛廻つて居ましたとも。此の節の貴婦人なんて者は、

方々飛廻るのが役目ですもの。彼れから海國婦人會の内相談で、平田の奥さん所へ行きました。あの奥さんは中々人をそらさない御世辭者ですから、肝腎の用向きは其方へ退けて、今まで馬鹿談をして居ました。」

「平田さんの内で。」

「其うですよ。其れについて、あなたに御談があるんですが、私の甥の仙吉の事ですわ。平田の奥さんも、大層心配して、あんな鈍帳芝居なんかへ出して置いては、追ひ〜悪い事を覺えるばかりだから、あなたの手許へ呼寄して、身の固まるやうにした方が宜いつて。私も其の方が當人の樂になると思ひますから、明日にも此方へ呼寄せて、玄關番でもさせようと思ふので御座います。」

「鳥渡御待ちなさい。では、龍谷を宅へ入れようと御前は言ふのぢや

な。

「其うですわ、本人の爲めを思ひますから。」

「そうして、景助に此事は相談しましたか。」

「あの景助にて御座いますか。」

(三三二)

「其うちや、私は兎に角、景助は此の内の戸主ぢやから、眞つ先きに相談をしなければ成りません。」

薩子は忌ま／＼しさうな顔をして、

「景助は幾ら戸主だつて、私とあなたとは彼れの親ぢやありませんか。親のいふ事なら、若い者は何んな無理でも負かないのが當り前ですわ。それに、あなたが景助々々つて、彼ればつかり大事に遊ばすから、倅や嫁が増長するので御座います。」

「いや、御前のいふ事は間違つて居る。老いては子に随ふと昔から言ふ通り、年寄が親の威光で若い者を押へ付けようとするから、家庭が圓滿に行かぬ例は世間に幾らもある。私が潔く官業界から退隠したのも、私のやうな老人が、何時までも幅を利かして居る時代では無い、此處は一つ若い者に地位を譲つて、ウンと働いて貰ひたいといふ意見なのぢやが、此の内の事だつて矢張り其うちや。景助といふ立派な養子がある以上は、私たちは引込んで、景助夫婦に萬事を任せてこそ圓く納まるといふものぢや。新陳代謝というて、追ひ／＼年よりが引込んで、若い者が世に出るは、其れが社會の法則なのぢやから、此の法則に従つて行けば自分も幸福なれば、一家も繁昌する代りに、此の法則に逆らへば、若い者から憎まれ、家庭に苦情が絶わぬといふ有様を來すのぢや。」

「其んな御説法は聞かなくつても知つて居ます。」
「知つて居るなら、景助を此の内の主人と立て、何事でも従ふやうにしない。」

「はい、何うせ年寄は若い者に叶はないのですからね。」

「其うちや、若い者に年寄は叶はない。其の覺悟で居てくれれば、家庭が幸福に暮らせるのぢや。」

「ですから、私景助にも仙吉の事は相談しました。」

「其うか、で、倅は何と言ふたかの。」

「あの、別に異存は無いと申しました。」

「異存がない。其れでは龍谷を内に入れて構はない。」

「其うです。異存がないどころか、其うした方が、仙吉の爲めにも何んなに仕合せだか知れないと申しました。」

「ふむ、景助が其ういふのなら、私に相談する必要はありやせん。能つく倅と打合せて、其の通り計らつたら宜からう。」

「其うですか。でも、あなたに黙つて致しては悪いと思ひましたから、其れでは、直ぐとそういふ都合に致します。」

まんまと良人を言ひくるめた薩子は、若夫婦の部屋へ遣つて來たが、兩親が休まぬうちは、何んなに遅くても、景助も素路子も起きて居るのが此の家の習慣なのだ。

「あの、景助。悦んで御くれ。父さまが仙吉を内へ入れても宜いと仰しやつたから、明日にも此處へ引越して來さす事にしようと思ひます。」

「其うですか、れ父さまが。」

景助は素路子と顔を見合はせたが、

「お素路。お前はね、鳥渡電話をかけて御くれ、仙吉は屹度彼處に居るに違ひないから、下谷の八百七十番へかけて、龍谷といふ人が居るなら呼出して御くれ。そうして、仙吉が出て來たら私が入代るからさ。」

(三三三)

龍谷仙吉は、其の翌くる日、築地の綱田方へ引越して來た。荷物と言つて、古い行李にラムブぐらゐで、其れでも役者の引越したといふ申譯のやうに、勸工場仕入の鏡臺が一つ積込まれて居た。そこで、仙吉の居室は、薩子の計らひで玄關脇の四疊半と極つて、老主人をはじめ、景助夫婦にも改めて薩子から引合はせる。別に極まつた用事とて無いから、玄關の取次ぎのほかに、庭の掃き掃除を受持つといふ事で、なまけ者の仙吉も當座だけは謹慎して居るから、別に纏續

を出す程でもない景助も、素路子も、仙吉を入れるについては、最初不承知であつたものゝ、養父用平から許しが出たと聞く以上は、其れに反く譯にも行かず、裏面では如何はしい疑ひがあるに拘はらず、表面は養母の甥として、其れ相應に待遇して居る。

斯んな有様で、綱田の家庭は割合に平穩であつたが、一方に會社の方では、社長の白瀬も、重役の綱田も、前々から氣にして居た株主の苦情が段々激しくなつて、風波が險惡となつた。其の苦情といふのは、白瀬と綱田とが今の地位に据はらぬ前から引續いたゴタ／＼で、先代の重役や社長が、會社の資本を流用して相場に手を出したのが全く失敗して、帳尻に尠からぬ穴を明けた。其の不埒が大株主仲間に知れたので、總會の結果、先の役員が退く事となつて、今の白瀬が社長になると、同時に、綱田は重役となつて、此の難局の跡を整理するといふ大

任に當つたのである。流石に此の大任を背負はせられたいけ、白瀬といふ人物は中々の敏腕家であるが、實業家としては餘りに情に脆いのが其の缺點で、大株主の推選によつて社長の椅子に据はると共に、段々跡始末に手を付けると、先の役員たちの不正を働いた事實が幾つも擧がつて来る。其れを暴露して仕舞へば其れまでいあるが、暴露した以上は先の役員たちを罪人に落さねば成らぬ。其ういふ冷酷なことは白瀬社長の性格として出来ないで、彼れは不正に遣はれた金高を、先の役員から辨償させて、示談で事を済ますべき方針を執つた。白瀬の此の情ある遣り方に、醜類共は感謝して、屹度辨償すべき事を誓つたが、然しながら、三十萬圓以上にも上る遣込みの高は容易に拂込む事が出来ないで、随つて會社の整理が抄取らぬ。最初は白瀬に望みを囑した大株主たちも、此の有様を見て、もどかしく思ふと同時に

に、誰れ言ふとなく、今の社長を始め、今の重役たちも、醜類どもに買収されて瀾縫策をして居るのだといふ噂が立つた。勿論當人たちの人格を知つて居るものは、此の流言を眞事とは信せぬが、一部の人は、白瀬や綱田に對して盛んに攻撃の矢を放つた。斯うなると、白瀬は兩方から板挟みの苦境に陥るのであるが、綱田等も其の卷添を喰つて心痛は一方でない。大株主に對して其の壓迫を弛めしむると共に、先役員に對して辨償の實行を促がさしむるより適當な方法はないので、白瀬社長以下重役連は其の事につき、日々額を集めて秘密會議を開いて居ると、給仕が一枚の名刺を持つて来て、「綱田さん。此の方が御面會を願ひますつて来て居ます。」その名刺には「東京タイムス記者猪上東洋男」と大きな活字で刷出している。

「あなたが綱田さんですか。」

製油會社の應接室に控へたは三十ばかりな人相の宜くない髻男で、此れが「東京タイムス記者と名乗る猪上東洋男なのだ。」

「私が綱田景助ですが、用事は何んな事です。」

猪上は落付き拂つて、糞に火を付けながら、

「實は御宅へ上がらうと思つたのですが、御宅では却て御談がしにくからうと、斯様に存じまして。他でもありません。あなたの御宅へ龍谷仙吉といふ男が同居して居る筈ですな。」

「龍谷は私の所に居ますが、其れが何うかしたんですか。」

「綱田さん。何うか此れを御覽なさい。」

猪上は折靴の内から一通の原稿を出して、景助の前に置いた。

景助が其れを取上げると、「貴夫人の亂行」といふ大きな見出しが付いて、今日の貴婦人と稱する者が、大かた品行の修まらぬは、社會の風儀の爲め嘆かはしき次第だといふ枕を置いて、記者は此の弊を打破する爲め、茲に一例として具體的の事實を摘發するが、其の槍玉に上ぐべき本人は、築地二丁目に立派な屋敷を構へて、日本製油會社の重役といふ身分ある綱田景助の養母薩子である事、薩子には現に用平といふ良人があるに拘はらず、年甲斐も無く此れまでも素行について兎角よからぬ噂のあつた事、近ごろ自分の甥と稱した龍谷仙吉なる者を自宅へ引入れたが、此の仙吉は壯士芝居の下廻りを勤める無頼漢である事、而も薩子と肉親の間といふは眞つ赤な嘘で、實は薩子と不義の關係がある事、此の事實は現に龍谷自身が仲間の下廻りに惚け半分公言したので明瞭である事、斯んな事柄が大袈裟に長々しく書延ばされて、

仕舞ひには、其の龍谷自身から二人の醜關係を聞いたといふ、何がし座なる大部屋の役者の談話がずらりと列べてある。景助は読み行くうちに眉を蹙めたが、

「これは龍谷ばかりぢや無くて、寧ろ私の母に關する事ですな。」

「其うです、あなたの御母堂が攻撃的なのです。手前の新聞では、此の事實を確かめたので、容易ならぬ事だから、大ひに筆誅しようといふので、此の通り現に原稿まで出來たのですが、退いて考へて見ますと、事實が其れに違ひないとしても、上流の秘密を暴露するのは、社會の秩序を保つ上に穩當でない。であるから、一應あなたの御耳に入れて、何とか紙上には掲げんで解決を付けたら、と斯ういふ譯で僕が伺つたのです。」

「して、解決を付けるといふこと。」

「あなたから母堂に其う仰やつて、一應御當人の反省を求めるのです。」

「其うですか。私は母に斯ういふ非行があらうとは信じないのですが、然し事實の有無は扱置いて、斯んな風評が立つたゞけでも捨置けない事ですから、母には私が何とか注意を與へませう。」

「では、此の記事は掲げてくれるなど仰やるのですな。」

「無論です。あなたが故々尋ねて下さつたのは、私に對しての好意でせうから、何うか紙上には掲載せられぬやうに希望します。」

「あなたの御希望は承知しましたが、網田さん。手前の方からあなたに對して好意を表した以上は、あなたの方でも、吾が社に對して好意を表して戴きたいですな。」

「好意を表するとは。」

「他ではありません。吾が社の事業を賛助して、千圓だけ御寄附が願ひたいのです。」

(三五)

謂はゆる悪徳記者の強請かたも進歩したものだ。單に現金を受渡するのでは、恐喝収財といふ罪名に陥るから、其の逃道を拵へて、事業を賛助してもらふといふ名義で金を取るのだ。此の悪辣な手段にかゝつたものは幾らもあるさうだが。綱田も其の手に加つたのだ。猪上は先つき原稿を出した折鞘から、今度は一枚摺の趣意書みたいなものを取り出した。其れには、社會の改良だの、政界の廓清だの、と鹿瓜らしい文句を列べて、つまり「東京タイムス」社の業務を擴張するにつき、志士仁人の義捐を仰ぐといふ事と、もし此の義捐をした人は名譽社友として待遇する、といふやうな頗る要領を得ない事が書いて

ある。

「では、千圓の寄附は承諾しましたが、小切手を書く間待つて貰ひたい。」

綱田は應接室から出て行つたが、暫くすると又歸つて來た。そうして手に持つた一枚の小切手を猪上の前に出した。猪上は其れを極めて衣兜へしまひながら、

「早速御承諾下さつて満足です。其れでは此の原稿は、紙面に掲げない代りに御手許へ差上げますから、何うか引裂くなり焼棄てるなりなすつて下さい。しかし、申すまでも無い事です、此の千圓は原稿を掲げぬといふ報酬とは別の意味で、即ち本社の事業へ賛助を願つたのですから。」

「何方でも私は構はん。」

「いわ、あなたは御構ひにならんでも、手前の方では、金を戴く名分が正くないと困るですから。」

猪上がいふ名分とは法網を潜る口實の事なのだ。

「そうして、綱田さん。あなたの御好意に對して、吾が社は今後も充分にあなたの御味方を致すつもりです。此のほかに、若しもあなたの御一家なり一身上について中傷するものでもあれば、吾社は全力を注いであなたを庇護する決心です。」

綱田は何とも答へをしなかつた。

「失敬だが、今日は取込んで居ますから。」

「其うですか。御多忙の半ば御邪魔をして済みません。では、失敬します。」

猪上は大やうに辭義をして、應接室の出口まで立つて行つたが、急に

思出したやうに。

「あつ、其うでした。あなたに今一つ伺ひたい事があります。尾上伯とあなたとは御親密な間柄とか承まはりましたか、其うでせうか。」

「左様。尾上伯は私の大恩人なのです。」

「そうして、咲枝さんといふ御令嬢とは御別懇ださうですな。」

咲枝といふ名を聞いて景助は色を變へたが、猪上の唇には微笑を帯びて居る。

「ひとり令嬢ばかりでは無くて、伯爵家の御家族は何方とも、心易くして居ます。」

「其うですか。いや、失敬しました。」

景助は相手の口から次ぎの言葉を待設けて居たに拘らず。猪上は意地わるく談を途切つて、室の外へ出て行つた。

重役室へ歸つて来た綱田は、顔が眞つ青だ。其れは養母の醜聞よりも尾上伯の令嬢咲枝の事について、猪土が別懇であるかどダメを押した一言が急所へ中つたのだ。

人の弱みを食ひ物にして居る彼れの口から、斯んな問を出したのは確に意味があるらしい。それは、咲枝と自分との間に出来た秘密を、猪上が知つて居るのではあるまいか。其の事について、咲枝を脅かしたといふ山川猛が、在ること無いこと世間へ觸れないとは限らぬ。寧ろ猛の性格から言へば、世間へ觸れるのが當り前くらゐだ。其れが猪上の耳へ入るのは何の不思議もない。綱田は此處まで推測すると怖ろしさに胸が跳る。そうして、養母の醜聞と同じやうに、自分の罪惡が原稿に書かれ、其の原稿を突付けて金をせびる猪上の姿がありくと眼

に見えて来る。

先つき原稿を突付けられた時は、淺ましき養母の行跡を心の中に呪うたが、其の淺ましいのは母よりも自分であつたのだ。生れが賤くて、無教育で、そうして思慮に乏しい養母の不身持は、其の不身持をする理由が無いとは言へぬが、假染にも綱田景助と言はるゝ紳士が、恩人の娘を疵物にしたのは、劣情といふよりほかに理由も何にも見出せない。何うせ金にこだわる惡徳記者などの脅迫は怖ろしくないが、脅迫されるやうな罪惡を犯した吾が身が怖ろしい。

今更ながら、綱田は良心の呵責に堪わかねて、會社の執務も上の空で、頓て退ける時間になると、何時もは車で内へ歸るのだが、斯んなムシヤクシヤした時には、公園でも散歩したら氣が紛れよう、と車屋は先きへ歸して、深川牡丹河岸の會社から富が岡公園へと足を運ぶと、門

前橋を渡つた所で、向うから息を切りながら駈けて来た少年がある。景助に突當つてバタリと倒れると、跡から追掛けて来た商人らしい男が、其の少年の襟首つかんで、

「この盗坊。」

どいひさま平手で顔を續けざまに擲つた。

擲られて、少年はヒイ／＼泣出したが、袂から大きな夏蜜柑が一つ轉げ出した。

仔細は知らぬが景助は仲へ入つて、

「可愛さうに、年も行かないものを、残酷ぢや無いか。」

「此の小僧は太い野郎なのです。此の通り店の代物を淡やあがつて。

此の後の見せしめに痛い眼をさしてやるんです。」

再び拳を振上げるを、

「おい、待て。其れでは、此の子がお前の所の商品を盗んだのぢやね。」

「其うです。此の蜜柑をくすねたんです。」

「全く御前は盗坊をしたのか。」

少年に尋ねると、

「其うだよ。僕が盗んだのだ。」

手の甲で眼をこすりながら少年は答へた。

(三七)

「其うか。お前が盗んだのか。」

綱田は情なげに少年の顔を打守つたが、相手の男に振向いて、

「しかし、御前の店の物を盗んだは悪いに違ひないが、其の爲めに此の子供を打擲するのは宜くない。制裁を加へるなら、警察官の手を假

るべきであるが、此の通り品物も出たんだし、子供の出来心でした事を、警察沙汰にするのは餘り大人氣ない談だから、何うか内分にして貰ひたい。此の通り私が頭を下げて頼むのだ。」

「其れやモウ旦那が仰やらなくても、只つた密柑ひとつで表沙汰にしようなんて、其んな心はありませんが。打遣つて置くと癖になりますから。」

「お前の言ふ所は尤もだが、二度と斯ういふ事はせぬやうに、此の子へは私から能く言聞かさう。これ、お前だつて、人の物を盗んで悪いといふ事は知つて居るだらう。」

少年は未だシャクリ泣きながら、微かに頷づいた。

「其うだらう。そうして。悪い事を知つて居ながら盗みをするのは愈々宜くない。成程子供心に彼れが食べたいとは思ふだらうが、盗坊を

して取つた其の蜜柑が何うして味からう。」

「いね、叔父さん。僕が食べようと思つたのぢやありません。」

「何、お前が食べなくて、何で盗坊をしたんだ。」

「でも、姉やに食べさせたいと思つたんだ。」

「こら、お前は其ういふ小賢い言譯で、罪を免れようと思ふのだ。」

「其うちやありません。盗坊したのは僕が悪いから、懲役にやられたつて仕方がないけれど、蜜柑は姉やに食べさせようと思つたんだ、其の姉やは、鹽梅が悪くつて内に寝て居るんで、咽喉が乾いて行けないから、蜜柑が食べたい〜つて言ふけれど、父が邪慳なものだから蜜柑ひとつ買つて遣らないのです。」

「ふむ、其れでは、お前の姉さんは熱病でも煩らつて居るのが。」

「其うです。熱がひどくつて、御飯も咽喉へ通らないから、蜜柑が食

べたいんだつて。姉やだつて。始めはお金を持つて居て、僕にも御小遣をくれたんだが、其のお金は皆父が捲上げて飲んで仕舞つたんで、蜜柑ひとつ買ふ御金も無くなつて仕舞つたのだ。其のくせ姉やに、手前は親不孝者だ、くたばり損ひだつて、餘り父が酷いから、僕あ姉やが可愛さうで、彼んなに欲しがるもんだから、盜坊して悪いといふ事は知つて居るけれど、姉やに食べさせようと思つて、此の蜜柑をくすねたのを見付けられ仕舞つたんだ。」

「其うか。お前のいふ事が本當なら、同じ盗みをしても同情すべき點がある。そうして、御前の家は何處だ。」

「家はつゝ其處の蛤町の裏なんだ。」

景助は聞了つて、

「此の子が斯んなに言ふんだから、全く跡方のない事でもあるまい。」

姉が病氣で蜜柑をほしがるので盗んだといふのは、如何にも哀れな談だ。ついては、何うか此の子の罪を免してもらつて、此の蜜柑は私が買受けて、此の子にくれて遣らうと思ふんだが。」

景助が墓口から一圓札を取出すを

「旦那。滅相な。蜜柑の一つくらゐ、私だつて、其ういふ譯なら此の子にくれて遣りませう。この蜜柑はお前に遣るから、持つて歸つて其の姉やに食べさせてくんねわ。」

「お前までが其うやさしく言つてくれるのは、此の子の爲めに仕合だが、では、此の一圓だけ外の蜜柑を私に賣つて御くれ。そうして、此の子の家まで届けて貰ひたい。」

「其うですか、宜うがす。そうして、お前の家は蛤町の裏で何といふ内だ。」

「柏木勘兵衛といふのが父の名前で、姉やお辰といふんだ。」
「何、姉の名がお辰。」
景助は小首を傾けた。

(三八)

「お辰」といふ名は綱田の胸に響いた、箱根で遇つた昔馴染のお辰が確か苗字は柏木と言つたが、此の少年の父親が柏木で、姉の名がお辰なら、屹度それに違ひない、男と違つて女名前は同じのが幾らもあるが、本人が吉原に居た時から、親元は深川だといふ事を聞いたやうな覺れもある。

しかし、たつた此の間まで箱根に達者で居た當人が、其れほどの大病だといふのも、何うやら腑に落ちぬ。景助は心の中に色々迷つたが「そうして、お前の姉は何をして居るのだ。」

「姉やの商賣かね。」
少年の顔には赤みがさして、返事に躊躇して居る様子を、景助は眼早く見て取つた。

「私に遠慮する事は無いから、在りのまゝを聞かして御くれ。」

「其う。高い聲では言はれないけれど、姉やは藝者なんです。」

「藝者だ。そうして、箱根に居たんぢや無いか。」

「其うです。」少年は眼を丸くして景助の顔を見詰めた。「叔父さんは能く知つて居るね。ぢやあ、姉やを呼んだ事があるんだらう。」

「其うちや無いが、お辰といふ箱根の藝者は、大層酒が好きぢやといふ事を聞いて居る。」

「叔父さんも其れを知つて居ますか。姉やは餘り御酒を飲むもんだから、皆なが狸々藝者だと言つたんだつて。そうして、御酒を飲むとだ

らしが無くなつて、父や死んだ母あに苦勞をかけた事もあるさうだけれど、姉やが稼ぐので、父だつて遊んで、酔拂つて居る事が出来たんです。其れに姉やが鹽梅が悪くなつて、家へ歸つて來ると、幾らか持つて居るだらうつて、姉やの金は捲上げてしまつて邪慳にするんだもの。」

「お前の言ふ事は能く分かつた。つまり、父さんが姉さん無情に取扱ふから、お前が姉さんを庇ふといふのだね。」

「ねつ、其うです。」

「年齒も行かないで、其の心掛は感心だが、幾ら姉さんの爲めだつて、盗みなんぞしては行かん。お前の盗みをするのは、姉さんを悦ばす爲めであらうが、巡查にでも引張られて行つたら、姉さんは悦ぶどころか、何んなに悲むか知れやしない。其うすれば、お前の志は無

になつて、姉さんに餘計な嘆きを掛けるだけだから、其ういふ道に缺けた事はするものでない。人間は何んなに苦い事があつても、正直にさへして居れば屹度仕合が來るものだから、何でも正直といふ事を忘れちやいけない。」

「叔父さん。有難う。僕は是れから屹度正直にします。」

「む、能く私のいふ事を聞分けてくれた。此れは其の褒美にお前に遣るから、姉さんに薬でも買つてやるがよい。」

景助が札を包んで出すと、

「其んなに貰つては濟まないね。」

「遠慮をしないで取つておくれ。そうして、後ほど、お前の處へ蜜柑が届く筈だから、其れも姉さんに食べさせて遣るがよい。」

「叔父さんは馬鹿に信切なんだな。矢張姉さんと呼んでた御客だら

う。

「いや、其うちや無い。」

「そうして、名前は何といふね。」

「名前なんぞは聞かなくても宜い。」

「でも、名前のない人に御金を貰つたといへば、先つき見たいに、くすねたんだつて、姉やは疑ぐるに違ひないからさ。」

「疑つたつて、其うで無ければ構ふ事は無い。其れより、早く家へ歸つて、姉さんを悦ばしてやれ。」

「其う。では、叔父さん。失敬。」

少年は御辭儀をして駆出さうとしたが、

「お前の名は何といふか。」

「僕ですか。僕は柏木太市てんです。」

(三九)

「姉や、今歸つたよ。」

「其う。大變遅かつたわね。」

覺束なげに寢床から頭を擡げたのは、猩々藝者のお辰なのだ。箱根で散々バラを搔いた元氣も、病ひには勝てない、恐ろしく寝れて、急に年が寄つたやうだ。

「太あちやん。お前は知つて居るだらう。先つき水菓子屋さんが斯んなものを置いて行つたよ。」

お辰の枕元には、夏蜜柑をギツシリ詰めた籠が置いてある。

「ぢやあ、僕より先きに來たんだね。姉やが蜜柑を欲しがらつて言つたら、他處の叔父さんが斯んなに澤山買つてくれたんだ。」

「其う。水菓子屋さんが、確に此の内に違ひない、お金は戴いてある。」

から、置いて行きますつて言ふけれど、私には譯が分らないから、受取らないつて言ふと、此方の子供衆が知つて居ますつて。大かた御前の事だらうと思ふから、預かつて置いたんだよ。」

「姉や。其んな心配しなくつて、直ぐに御喰べよ。叔父さんが御前に呉れたんだからさ。そうして、此處にも大きいのが一つあらあ。」

少年太市は、自分が盗みかけた蜜柑と、先つき綱田に貰つた札の包みを、姉の前へ出した。

「其れからね、斯んな御金までくれたんだよ。明けて御覽、一圓が五枚あらあ。」

「わつ、其んなに御金まで。お前は其の叔父さんを知つて居るの。」

「僕あ知らないさ、知らないから名前を聞いたたら、名前なんざ聞かなくつても宜いつて。」

「ぢやあ、名前を言はなかつたの。」

「其うなの。で。姉さんが箱根に居て、御酒が好きだといふ事を、其の叔父さんが能く知つて居るんだもの。大かた姉さんと呼んでた御客だらうつて言つたら、其うぢや無いつて。」

「でも、見ず知らずの人が、斯んなに蜜柑を澤山くれた上に、五圓といふ御金まで下さるといふのは、私に合點が行かないよ。太あちやん。お前を疑るんぢや無いけれど、もしや、姉さんが餘り貧乏して居るか、ひよんな出来心を起したんぢや無からうね。」

「出来心つて。」

「人さまのお金を、お前が盗んだんぢやあるまいね。」

「冗談言つてらあ。僕が其んな事を。僕は是れから正にするんだ。人間は何んな苦し事があつても、正直にさへして居れば、屹度仕合が

来るつて、其の叔父さんも言つて居たよ。」

「其う。お前に限つて、其んなさもしい事をしまいと思ふけれど、何うも私には不思議でならないよ。」

「ぢやあ、姉やは矢張僕がくすねたんだと思つて居るの。僕困つてしまふな。だから、名前も知らない人に御金を貰つたといへば、姉やが疑ぐるに違ひないつて言つたんだけれど、疑つたつて其うで無ければ構ふ事は無いつて、其の叔父さんが強情を張るんだもの。」

「鳥渡御待ち。お前は先つき私が蜜柑を欲しがらつて言つたら、其の人が買つてくれたと言つたね。」

「其うさ。」

「何うして、知らない叔父さんに其んな事を談したの。」

根問ひをされて、少年の太市は返事に行詰まつた。

「姉や、其んな事は何うでも宜いぢや無いか。」

「否、何うでも宜かあ無いよ。其の譯を姉さんに御談した。」

「話さなくつても宜いから、早く蜜柑を御食べな。彼んなに食べたがつて居たんぢや無いか。」

「でも、其の譯が知れなければ、食べて善いものか悪いものか、私には分らないもの。」

「ぢやあ、譯を話したら、姉やは屹度食べてくれるんだね。でも、行けないや。譯を談したら、姉やは屹度僕を叱るんだもの。」

「いわ、叱りはしないから、話して御覽。」

「あの、濟まないけれど、僕はくすねたんだ。」

「は、矢張私が思つた通り此のお金を。」

「其うぢやないや。蜜柑を只つた一つさ。」

(四〇)

太市は姉に問詰められて、仕方なしに事實を白状した。

姉に食べさせたい爲に蜜柑を盗んだのを捕まつたこと、通り掛りの紳士に助けられて、意見をされた上、金を恵まれた事、段々仔細を語るうち、お辰の眼からは、熱い涙がポロ／＼こぼれる。

「お前は私みたいなものを、其んなに思つてくれるの。太あちやん。堪念して御くれ。私が意氣地のないばかりに、お前にまで苦勞をさせた上、そんなさもしい心を起さして。お前が悪いんぢやない、皆姉さんが悪いんだからね。」

「悪い事したのは僕ぢやないか。其れに姉やが謝まる譯はないよ。」

「でも、私はお前がいぢらしくつて。太あちあん。其の代り、私が達者にさへなれば、お前に此んな見ぢめな思ひはさせやしない。屹度お

前の肩身が廣いやうにして上げるからね。暫くだともつて辛抱しておくれ。」

「姉や。其んな事は何うでも好いから、早く達者になつて御くれ。そうして、折角餘處の叔父さんが呉たんだから、其の蜜柑を食べて御覽よ。」

「しかし、其の人は誰だらうね。私が箱根に居た事や、御酒が好きな事を知つて居るのは。御座敷へ呼んだ、御客に違ひないんだが。」

「叔父さんは其うちや無いつて言つたよ。」

「そうして、何んな様子の方だつたの。」

「何んなつて、立派な人よ。鼻の下に髯が生えて、袴を穿いて居たよ。」

「年は若くつて。」

「餘り若かあ無いけれど、好い男だつたせ。」

「おほ、子供のくせに、其んなませた事を言つてさ。しかし、誰だらうね。」

お辰は熟考へたが、箱根で狸々藝者といふのは通りものだから、多くのお客のうちで、誰とも當りが付かぬ。しかし、其の御客のうちで東京から来て居た人といふだけは推察が出来るが、一度や二度、お座敷へ呼ばれたきりで、斯んなに信切を盡くす筈はない。

お辰は此處まで考へると、吉原に居た時に深間であつた竹澤、今は綱田と名乗つて居る景助と、福住で邂逅した事がフツと胸に浮ぶ。そうして、昔と變つた綱田が八字髻は、今もアリ、記憶に残つて居る。

「太あちやん。其の方は四十ぐらゐで、眉が濃くて、左の眼の上に黒子がなくつて。」

「其うさ。黒子があつたよ。ぢやあ、矢張姉やの知つて居る御客なん

だね。」

「大かた其の方に違ひないんだよ。」

姉弟が談して居る處へ、ヒヨロ／＼歸つて來たのは父親の勘兵衛で、何處で飲んで來たか大分酔つて居る。

「あ、折角好い心持で歸つたに、病みはうけた手前の顔を見ると、酔つた酒も醒めつちまわあ。やい、太市。水持つて來い。」

舌を舐めずりながら眼を据わて、四方を見廻したが、

「やあ、豪勢だな。酔醒めには御詔へといふ夏蜜柑があるな。己らの前では、金が一文も無ねと吐かしやがつて、己らが居ねねと、斯んな贅澤な真似をして居やがある。兎に角小言は跡廻しにして、一つ御馳走にならうかな。」

勘兵衛はにぎり寄りながら、蜜柑を取らうとしたが、

「おや、此奴はお札だな。一圓で五枚か。それだけあれば鳥渡飯めらあ。蜜柑の方は願下げにして、此の方を貰つて置くよ。」
無理に引渡つて立たうとするを。

「父さんの待つて下さいな。」

「其のお金は父のぢや無いよ。」

姉弟が左右から追続つた。

(四一)

「其處放せ。何うして邪魔をしやがるんだ。だつて、子のもものは親のものだらう。己らが此の金を持つて行くのに文句は無い筈だ。」

「でも、父さん。此のお金は私のぢや無いんですもの。」

「へい、お前の金でないものが、何うして枕元にあるんだ。」

「だつて、人様に戴いたんです。」

「此の金をか。其うぢやあるめね。お前は己らに隠して、臍線を持つて居るに違ひねね。箱根から歸つた時、在りつたけど、己らに渡した高が餘り少いたんだもの。己らに渡すと皆つかつてしまふてんで、隠して居るんだらう。」

「あら、其んな事はありません。私の持つて居るだけは、皆お前さんに投出して、斯んなに貧乏して居るぢやありませんか。此の金は全く人さまに戴いたのです。」

「ぢやあ、何か。お前の馴染とか旦那とかいふやうな人が、見舞にでも来てくれたのか。」

「其うでも無いけれど、大かた私を知つて居る御客でせうよ。太あちやんに此の御金を托けて下すつたんです。」

「そうして、お前は其の客が誰だか知らねねのか。何うも談が怪いな。」

「多分、あの人だらうといふ當りは付いて居ます。」

「うむ、其れは何といふ人なんだ。」

「私の推量に違ひがなければ、其れは網田さんと言つて、私が吉原に居た時分から、御馴染の方なんです。」

「何、網田さん。名前は何といふんだ。」

「名前は景助といひました。」

「では、網田景助といふんだな。斯うつと、何處かで聞いたやうな名前だせ。」

勘兵衛は暫く考へたが、

「うむ、其うだ。此の先きの牡丹河岸で、製油會社の重役が確か其れなんだ。ちやあ、お前は其の方と疾うから馴染なんだな。」

「吉原に居た時は、まだ竹澤さんと言つて、書生さんでしたが、今で

は立派な人になつて、そうして、牡丹河岸に會社があるといへば、愈々網田さんに違ひはありません。」

「わつ、では、何か。お前が吉原に居た時分、散々浮かれて、己らにまで苦勞をかけた彼の竹澤といふ書生さんが其の網田なのか。人の行末ほど分らねわものはねわな。」

「本當に、私も久しぶりで箱根で會つた時は、餘りな變りやうだから驚いてしまつたの。」

「しかし、お前は豪勢な御客を持つて結構だ。そうして、折角その御客が呉れたものを、己らが引渡らうとしたは悪かつた。勘忍してくんねわ。」

勘兵衛は急にやさしくなつて、

「だが、お辰。その網田の屋敷は何處だらうな。」

「何處だが。私は箱根で一度こつさり、會つたばつかしだから知りません。」

「其うか。勘兵衛は何やら考へて居たか」

「己ら鳥渡出て来るよ。」

「父は又お酒を飲みに行つて酔拂ふんだらう。」

「餓鬼のくせに生意氣な事をいふもんぢやねわ。鳥渡そこまで片足しに行つて来るんだ。」

よろしく出て行つたが、其の足で、牡丹町の製油會社へ寄つて、重役綱田の住居を確めた上、築地の屋敷へ尋ねて行つて、「眞平御免ねえ。」と西洋作りの玄關に突立つた。

(四二)

景助は未だ歸つて居ない。取次ぎには例の龍谷仙吉が出た。

「私は深川 蛤町の柏木勘兵衛といふ者で御座んすが、旦那に御眼にかゝりたいんで、故々伺つたんです。」

姿が見すばらしい上に、酒臭い息で巻舌だから、仙吉は驚いた。

「折角だけれど、主人は不在です。」

「えつ、旦那は未だ歸らねわんですか。ぢやあ、宜うがす。御歸りなさるまで、私あ此處で待つて居ます。」

玄關先に大胡座を搔いたので、仙吉は愈手古摺つた。

「君。そんな所で邪魔をしちや困るぢや無いか。主人は何時歸るか分からぬから、又出直して來たまへ。」

「處が、其うは出來ねわんです。急に旦那に御眼に掛らなくちや成らねわんですから。」

「では、何んな談だか、僕が聞いて置かう。」

「お前さんが聞いて置く。冗談いつちや行けねね。玄關番なんかと押問答するくらゐなら、故々遣つて来やあしねねんだ。旦那が居なけりや、立派に旦那に代つて挨拶の出来る者を御出しなせね。」

「所が、僕は主人に代つて立派に挨拶をするよ。」

「書生のくせに生を言つて居らあ。」

「おい、失敬な事をいふな。斯う見ても、僕は只の書生ぢや無いぞ。主人の景助君とは従兄弟同士で、即ち當家の留守を預かつて居る代表者なんだ。」

「へい、お前さんがゝね。」

「其うだ。だから、主人に代つて僕が用向を聞かう。さあ、此方へ来たまへ。」

仙吉は退屈まざれに、酔拂ひを弄ふつもりで、自分の部屋へ通すと、

「其れぢやあ、お前さんが此の捌きを付けるを仰やるんだね。」
「其うさ。」

「そうして、失禮ですが、御名前は何と仰やいますね。」

「僕の名前か。僕は龍谷仙吉というて、當家の親戚ぢや。」

「其うですかね。私の名處は先つき申上げた通りですが、御宅の旦那には、娘が色々御最負に預かりまして、有難う存じます。」

「ねつ、鳥渡待つてくれたまへ。君の娘が當家の主人に最負を受けて居る。此れや頗る珍聞ざや。一體君の娘といふのは何者ぢやね。」
「娘は藝者です。」

「へい、其の藝者を此處の主人が最負にして居る。何うも不思議ぢやね。君は門違ひをしたらんぢや無いか。此の家は綱田といふんだよ。」
「そうです。綱田景助と仰やるのが旦那でせう。」

「其の景助が藝者を最負にして居るといふのか。」
「其の通りです。最負も最負、十年も前から御最負を受けて居ますんで。」

「其うかなあ。實に人は見掛けに寄らないね。あんな真面目な顔をして。處で、其れから何うしたといふんだね。」

「實は娘が病氣の爲めに内へ歸つて居ますんで、先程は旦那から御丁寧な御見舞物を戴きましたが、其の御禮をも申上げたいし、又折入つて御願ひの事も御座いますので。」

「ちやあ。手前の主人が君の娘へ病氣見舞をしたんぢやね。此奴は愈よ奇妙ぢや。」

(四三)

「其の御親切に甘へちやあ濟みませんが、何しろ稼ぎ人の娘に煩らは

れて、内の者は食ふ物も食はねわといふ始末なんですから、其處の所を、此方の旦那の御慈悲で以て、何とか御助けを願ひますと、親子三人が浮べるといふ譯で御座んすから。」

「宜い、分かつた。つまり、君は幾らか金が貰ひたいと斯ういふんだね。」

「誠に厚がましい御願ひで御座いますが、何うか宜く御取計を願ひたいんで。」

「其れで、金高は幾らほしいんだね。」

「幾らと申して限りは御座いせんが、まあ、左様です。此處で五十圓ばかしもあれば大きに助かりますんで。」

「五十圓、其うか。今いつた通り、僕が留守を預かつて居るんだから、大概の事なら僕の一寸で捌くんだけれど、實は、主人が君の娘と其う

いふ關係のある事は、始めて聞くんだから、此ればかりは僕だけで取計ふ譯に行かん。」

「其うしますと、何うして御くんなさるのです。」

「左様さね。兎に角、主人に聞いて見た上で、其れは氣の毒だから金をやつてくれと言ふんなら、直ぐに君の處へ届けてやらう。」

「でも、お前さんは、主人に代つて挨拶すると言つたぢや無いか。」

「だから、今も言うて居るぢや無いか。事件が事件だから、僕の一寸に計らう事が出来んだ。僕も折角君に頼まれたんだもの、主人が其んな金は遣らんで宜いと言つても、僕が幹旋して屹度物にして上げるよ。だから、今日の所は我慢して歸りたまへ。決して僕が悪いやうには計らはんから。」

「其うですか。何だか當てに成らねえ談のやうだけれど、では、今

日は歸りませう。」

「うむ、其うしたまへ。大丈夫當てになるから。そうして、君の内は何處だか、其れを聞いて置かう。」

「内は今いふ通り、深川の蛤町ですが、御返事なら私が改めて聞きに來ます。」

「そして、君の娘といふは一體何處で藝者をして居るんだ。」

「先頃まで箱根に居ましたが、元は吉原の仲の町に出て居たんで、此方の旦那には、其時から御最負になつて居るんでさあ。」

「其うか。して見ると、大分長い間と見ゆるね。」

「其うです。ざつと十四五年にもなりませうよ。」

「十四五年。其奴は驚いた。そうして名前は何といふんだね。」

「娘の名ですか。本名も藝名もお辰てんです。」

「へい、お辰さん。何だか名前を聞いたいけども、スツとして意氣な女のやうだね。」

「冷やかさないで、何うか私の無心を宜く御頼み申します。」

「心得た。僕が受合ふからは、大船に乗つた氣で居るさ。おや、もう、御歸りかね。何にも御愛相が無かつたね。又來たまへ。」

仙吉は茶かし半分に勘兵衛を送出すと、其の足で薩子の部屋へ駈込んだ。

「叔母さん、一大事の御注進です。」

「お前は、何だね、騒々しい。」

「でも、一大秘密の發見。新聞なら號外を出すといふ樁事が出來たのです。」

「何ういふ事なの。」

「何ういふ事つて、驚いては行かんですぞ。景助君に、馴染も馴染、十五年も馴染んで居る藝者があるから不思議でせう。」

「お前は屹度誰かに擔れたんだらう。景助に其んな洒落つ氣があれば談せるんだが、彼れに限つて本當に悪堅いんだからね。」

「處が、僕のいふのは、確かな事實です。今日も其の女の所へ、景助君から見舞が行つたが、別に五十圓だけ貸してくれつて、女の父親が只今ぐすりに來たんです。」

「して見ると、堅い〜と私等に見せかけたのは、矢張芝居をして居たんだね。仙ちゃん。私等よりは餘程役者が上かも知れないよ。」

(四四)

自分の留守へ其ういふ珍客が飛込んだと知らぬ景助は、少年太市と別れてから、富ヶ岡の公園へ足を入れた。

會社で一日事務を執つて壓付けられたやうな頭が、青葉を渡る風に吹かれてスツとしたが、胸に踏まつた愁には更に新なる悲哀を覺ゆる。箱根で會うた時は、羨ましいほどノン氣だと思つたお辰さへ、今では其ういふ見じめな境遇に居るのを見ると、矢張人生は涙より他にない。無心のやうに此の公園をぶら付いて居る人たちも、外から見ゆぬ其の懐ろの底には、何等かの苦痛や心配を刻んで居るのだらうと思ふと、今まで快かつた空氣も急に蒸熱いやうな感じがする。景助は長き旅に勞れた順禮のやうに、共同椅子に腰を掛けたまゝ、黙想に耽つて居ると、何時しか背を叩いた者がある。ハツと振返つて其の人を見上げると同時に、驚いて椅子から立上つた。

「先生でしたか。實に意外な處で御眼にかゝりました。」

「暫く會はんうちに、大分紳士らしくなつたね。」

網田が、「先生」と呼掛けたは、年の頃五五六な、長い髯のある老人で、茶色に焼けた紋附羽織に、臺灣バナマの古帽子を阿彌陀に冠つて太いステツキを突いて居る。

「先生の御薫陶で、何うか斯うか人らしくはなりましたが。一度御禮に上がらうと思ひましても、先生の御住居が知れないものですから。」

「はゝゝ、吾が輩は天下の浮浪人ぢやから、行方は何處と定まらん。」

「大學の方を御退きになつた事は新聞で知りましてんで、早速駒込の御宅へ駈付けたのですが、其の時、既に先生は何處へか御引越しになつた跡でした。」

「其うか。今から考へると、些し大人氣ない遣り方ぢやつたが、君も知つて居るぢやらう。羅馬法の囑托講師であるドーグラスが、餘り學生に對して暴慢無禮ぢやから、吾輩は此のステツキで懲らして遣つた

のぢや。所が、ドーグラス先生、この事を大使館に訴へをつたと見
て、大使から外務省へ抗議を申込んで、其の結果は、吾が輩にドー
グラスに對して謝罪しろといふ文部大臣の命令ぢや。吾輩は其んな馬鹿
氣きつた命令に服従する事は出来んから、斷然辭表を出してしまふた
のぢや。」

「確か教授連にも先生に同情して、學長に反抗された方が多かつたと
伺ひましたが。」

「幾ら反抗してもダメぢや。大學總長は文部の鼻息を伺ふばかりで、
其の文部が外務大臣に一日を押して居れば、外務大臣は外國の公使に
頭が上がらんのだから。しかし、吾が輩の行爲が國際問題になつて、
其の爲めに進退したといふ事は、吾が輩に取つて寧ろ榮譽かも知れん
て。あはゝゝ、網田君。そんな過去の線言は止しにして、君も昨今は

實業界に雄飛して居る様子ぢやから、大いに儲かるぢやらう。儲け口
があるなら吾が輩にも半口ばかし乗つけて貰はうかな。」

「先生は相變らずノン氣ですな。如何でせう。丁度食事の時間ですか
ら、何處へか御件を致して、ゆつくり御談を伺ひたう御座いますか。」
「君が御馳走してくれるのか。其れは忝いが、會社の重役と料理茶屋で
會見して、日糖事件のやうな嫌疑を蒙るのも下さらんからな。矢張公
園のロハ臺が、吾が輩のやうな貧乏人には、適當な應接所ぢや。其れ
とも、斯んな所で立談をしては紳士の態面に關すると、君は言ふの
か。」

「其うちやありません。」

「では、君も此處へ腰を掛けるさ。然し網田君。君の顔色は大層憔悴
して居るやうぢやが、物質界には成功しても、矢張精神に不安がある

と見わるな。」
老壯士は憐むが如く綱田の顔を見詰めた。

(四五)

「世間とは没交渉な吾が輩ぢやが、君の不安は吾が輩にも幾分か想像が出来るのぢや。君の會社は大分もめて居るといふぢや無いか。其んな事なら屈托せんで宜い。其れは、社のうちに黨派の争ひもあるであらう。仲間同士の嫉妬や競争もあるであらう。吾が輩のやうに、學問といふ死物を扱つて居る學者や博士の間にも、其ういふ小せり合ひは免れんのぢやから、まして、實業社會や政治社會に其ういふ事のあるのは當り前ぢや。しかし、最終の勝利は正直ぢや。正義の道さへ踏んで行けば、惑ふ事も怖れる事もない。そうして、君が正義の士であるといふ事は、大學で君を薰陶した吾が輩と、君を吾が子のやうに愛撫

せられた尾上伯との二人が保證する。よし、世間で君に對して何ういふ惡聲があらうとも、新聞が何んなに攻撃しようとも、尾上さんと吾が輩とだけは君を信じて疑はんから、躊躇や煩悶はよしてしまつて、勇ましく戦ふが宜いさ。吾が輩のやうな情け物は例外ぢやが、人生は只戦ひあるのみぢや。」

「先生が今も其れほごまで、私を信じて下すつて、懇篤なる訓戒を御與へ下さいます事は感謝いたしますが、然し、私の煩悶は其ればかりぢやありません。」

「ほう、會社の事より他に煩悶があると君は言ふのか。いや、其れも吾が輩に想像する事が出来る。では、君の煩悶する原因は君の家庭にあるんぢやらう。」

「先生の御詞の通りです。」

「ふむ、其うか。過ぎ去つた事を言ふても仕方が無いが、吾が輩は、君が綱田家の養子となる事について、最初から不賛成であつたのぢや。君の如き有爲の人物が、綱田家の家名と財産によつて身を立てようとしたのは、吾が輩に言はずと卑怯ぢや。しかし、其れは君ばかりを責むべきではあるまい。君に言はしたら、恩人たる尾上伯から勧められたんで、拒絶する事が出来なかつたのであらう。其の點は吾が輩も君に同情するが、然し、一旦綱田の姓を名乗つた以上は、仕方がないでは無いか。家庭の煩悶といふのは母さんの事ぢやらうが、既に母さんとしたからは、子としての道を盡くすより他はない。よしんば、母さんに何ういふ不徳があらうとも、君は其れを庇つて行くのが君の責任なのぢや、既に今日まで、君の家庭について何等の破壊を來さんのは、君が其の責任を盡くして居るからぢやらうと吾が輩は察するが、今後

とても、君の責任は其處にあるのぢや。其れは随分困難ではあらうが、如何なる難關に在つても、屈せずと事を處するのがわらい人間ぢや。恐らく君自身も下らぬ人間とは思ふて居まいが、力めてわらい人間になれ。そうして、わらい人間は自分の弱點を人に打明ける勇氣のある者ぢや。もし亦君に其れ以外の弱點があるなら、吾が輩は聞かうよ。聞いた上で相談に乗らうよ。」

(四六)

狷介不遇にして、世に容れられねば、自分も亦世を容れぬ法學博士佐久間銚三は、綱田が法科大学に學んだ其の昔から、師とも父とも頼む人なのだ。そうして、久しぶりに邂逅した博士からの忠告は、綱田をして多少人意を強くせしめたが、然しながら、煩悶の中心は博士の謂はゆる會社の内訌や家庭の亂脈よりも他にあるのだ。恩人の令嬢咲枝

と道ならぬ事をした過去に對する悔恨と、未來に對する恐怖とが綱田の頭を毒蟲のやうに掻きむしるのだ。そうして「其れ以外の弱點」があるかといふ博士の一言は、其の毒蟲に刺された瘡痕へ、人の手が觸つたほど綱田は痛切に感じたのであるが、然しながら、此の秘密だけは博士に打明ける勇氣がなかつた。

「別に弱點と言つてありませんですが、先生の御教訓を承つた御蔭で、大いに覺悟する、所が御座います。」

「其れなご結構ぢやが、然し、綱田君。君のやうな正義な士でも、絶對的に弱點がないといふ譯は無い。現に君は私の煩悶は其ればかりで無いと言ふたぢや無いか。あはゝゝ、吾が輩が其んなに立人つて追及するのは愚の至りぢや。人の知らない煩悶は自分で處置をするさ。もし亦君の手で處置が出来なかつた場合には、何時でも吾が輩が相談相

手にならうよ。綱田君。今日は此れで失敬する。」

「先生。何うか御宿所だけ私に御聞かせを願ひます。」

「吾が輩が住居か。借金取がうるさいから滅多に人には知らさんが君だけには言うて置かう。砂村の寄り付きで、焼芋屋の横町の佐久間といふ貧乏人ぢやといへば直ぐに分る。」

「いづれ御宅を訪問いたします。」

「ぢやあ、又會はうよ。」

佐久間博士がノソリ／＼彼方へ立つて行くのを景助は見送つて、自分は築地の宅へ歸つたが、養母の薩子は留守へお辰の父親が無心に來た事を故と口へ出さぬから、景助は何も知らう筈がない。

其の夜は何事もなしに、翌る朝、起きて丁度食事をして居ると、

「旦那さま。あの尾上様の御嬢さまが御眼にかゝりたいつて入らつし

やいました。」

女中の取次ぎで、景助はハツと驚いた。

「あの、咲枝さんが。」

「左様で御座います。」

「では、素路子。お前が案内して、私の書齋へ御通し申しておくれ。」
妻君の素路子が應接して居る間に、自分も食事を済まして咲枝に對面すると、相手は氣の故か、色が眞ッ青だ。

「網田さん。御出勤遊ばす所を御邪魔いたして済みませんが、急に御眼にかゝつて御相談を致さねばならぬ事が出来ましたので。」

「其れは、何んな事です。」

景助が四方を氣遣ふうちに、咲枝は懐ろから一通の手紙を取出した。

「網田さん。昨夜、私の處へ斯なものが届きました。」

咲枝の聲は極めて低いが顔へて居る。

(四七)

咲枝が取出したは、例の悪徳記者猪上東洋男から咲枝に對する脅迫狀なのだ。貴嬢の秘密は吾が社に於て詳しく探知して居る。秘密といふは貴嬢と大日本製油會社の重役網田景助といふ紳士との關係である。吾が社は社會の風紀を矯正する上に於て黙して居られぬから、屹度紙上で筆誅を加へようと思ふが、然しながら、一應貴嬢の覺悟を確める必要があるから、此の書面を差上げる。もし此の事件について貴嬢の方で言ひたい事があるなら、自宅まで尋ねて来てくれ。朝のうちは大かた在宅して居る、といふ意味で、芝區田村町何番地といふ自分の處が書いてある。

網田は一通り讀了つてホツと息を吐いた。脅迫の仕方は、昨日自分を